

層富

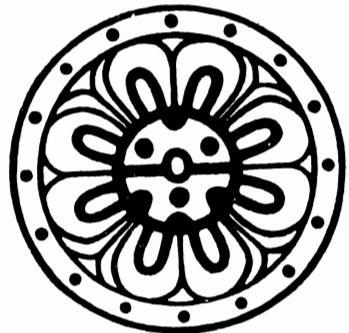
(川口勇書)

会誌名「層富」(そほ・そふ)の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「曾布」「添」とも記され、「倭六県」(やまとのりくのがた)の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春二月壬辰朔辛亥(20日)の条に見える「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

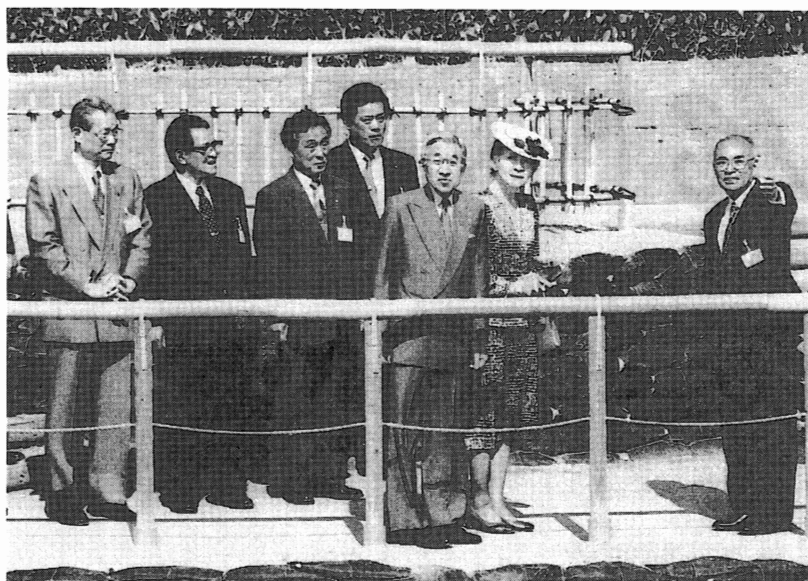
古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌の名としました。ご愛顧の程を。(網干善教)



会章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ、単純な円形にまとめ、音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも、二人三脚で楽しんでるようにも見えます。

(基本デザイン 朱雀・寛裕)



天皇・皇后両陛下に御説明申し上げている網干会長

第十九号 目次 二〇〇二年

巻頭言……………	網干 善教	1
記念講演		
高松塚古墳とキトラ古墳の壁画……………	網干 善教	2
稲荷駅と加茂駅のランプ小屋……………	柴田 晃良	4
漢 詩……………	片桐 一夫	9
私の歩んだ道(わが半世紀) 「すかたん近衛兵」嘆き節……………	繪内 正久	10
一期一会……………	内田 由男	20
写真の技術と感性……………	寺嶋りくお	21
短 歌……………		23
芸術のお話……………	梶野 哲	31
ある明治人の日記より(終)……………	繪内 正久	37
俳 句……………		46
グループからの便り……………		52
第十九回文化祭記録……………		99
二〇〇二年総会記録……………		104
会 則……………		
役員名簿・組織名簿・会員名簿……………		

饒益の幸

会長 網干善教

先年明日香村で発掘され、話題となりました「亀形石造物」の調査の過程で注目すべきことがありました。それはこの亀形石造物の傍から「饒益神宝」という貨銭が出てきました。この貨銭は皇朝十二銭の一つで、平安時代の清和天皇の貞観元年（八五九）に鑄造されたものです。そこでこの「饒益」という意味です。読み方は漢音で読みますと「じようえき」ですが、呉音で読みますと「にようやく」です。この貨銭の場合は呉音で読んでいます。

饒益という熟語は仏典のなかでも非常によく使われています。意味は一般的には「豊かで、多い」ということで「恵まれている」とか「豊饒である」といったことですが、仏教用語としては、「多くの利益を与える」ということです。

私たちの文化活動も、地域の人たちや、会員の方々にも利益をもたらす会でありたいと思います。そのために一層結束し、努力して、幸せをもたらすような文化協会でありたいと念願しています。

総会記念講演（要旨）

高松塚古墳とキトラ古墳の壁画

関西大学名誉教授 網 干 善 教

奈良県明日香村にあり高松塚古墳で壁画が描かれていることが分かりまして、大変な話題と関心をもたれましたのは昭和四十七年の三月でした。それから今年でちょうど三十周年ということになります。

そして今年はその南側の近くにありますキトラ古墳をデジタルカメラによって撮影したところ、墓室内東壁面北側に獸頭（面）人身像が描かれており、その意義について様々な意見が述べられています。

その問題はあとで述べるとして、高松塚やキトラ古墳の壁画を考えようとして、大切なことは基本的なこととの理解であります。すなわち高松塚やキトラ古墳では何が描かれているかということから出発しなければなりません。それを考えないで局部的な観察からだけで問題

を考えるわけにはいきません。

基礎的理解の出発は壁画の内容です。結論的にいいますと、壁画に描かれていたものは、天井の星宿、そして東と西の壁の中央上部に太陽と月の絵です。特に今年に入って分かったことですがキトラ古墳の太陽には三本足の鳥の絵が描かれているということ。こうした例は中国や高句麗にもあります。日本では有名な法隆寺の玉虫厨子にも描かれています。中国の神話に基づく説話からくる表現です。

次に四方の壁に動物の絵があります。すなわち東壁には青龍、南壁には朱雀、西壁には白虎、北壁には玄武の絵があります。これを四神図といいますが、なかには「四方を守る神」といいますが龍や鳥や虎は神ではあり

ません。したがって四神を神とするのは単に漢字の意味からであって四方に獸を配置しているということです。

ところが、高松塚古墳では南壁の朱雀図がありませんでした。これを描かれなかったと考える人もいます、描かれていたが盗掘のために消滅したと考える人もいます。私たちは消滅したと考えて最初から主張してきました。今回、キトラ古墳ではその南壁に見事な鳥の絵が赤い色を基調として描かれていました。こうしたことから高松塚古墳にも描かれていた可能性が高くなりました。そしてその鳥は今まさに飛び立とうとする姿を描いた姿であると考えられます。そこで私はこうした朱雀図を四つの姿に分類しました。第一は静止といって鳥が脚を揃えている姿、次は歩行といって歩いている姿、そしてキトラ古墳のように飛び立つ姿、これを頤頤（けつこう）と表現しました。最後は飛翔という飛んでいる姿です。このように考えて朱雀の表現を見ていこうと思っっています。

それはそれとして、四神の絵のうち高松塚古墳とキトラ古墳の大きく異なるところは西壁の白虎の向きが反対なのです。すなわち、高松塚古墳では南向きであるのに対

してキトラ古墳では北向きになっています。なぜ違うのかという理由は分かりません。

次に高松塚古墳では東西両壁に男・女四人の人物像が群像形式で描かれていましたが、今回のキトラ古墳では獸頭人身、すなわち頭や顔が獸で、体は衣服をまとった人間の像に描かれています。ここに大きな問題があります。高松塚古墳では、男女人物像であるのにキトラ古墳では獸頭人身の十二支像となっている。なぜこのような違いがあるのか。という問題と獸頭人身の絵の起源は古代中国にあるとは思われるがそれがどのように変遷してきたのかということ。朝鮮の慶州の墳墓にあるのはキトラ古墳より新しいものです。ここにも大きな疑問があります。



稲荷駅と加茂駅のランプ小屋

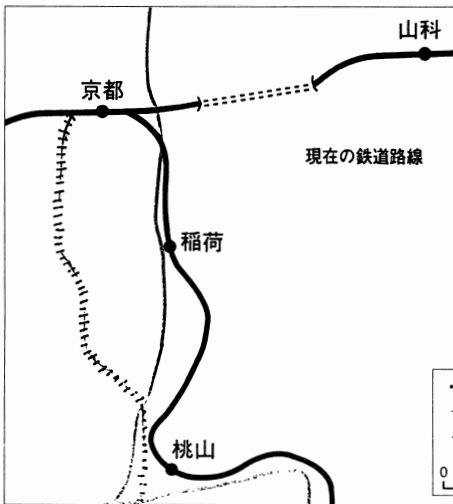
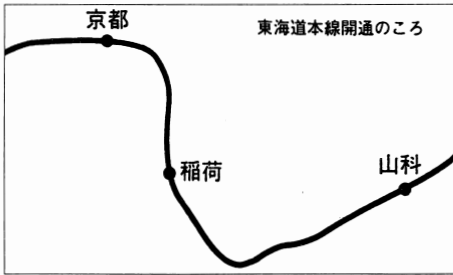
柴田 晃良

平成九年三月一六日、文化財講演会「近代城陽の鉄道交通」（寺田コミュニティセンター）で、稲荷駅と加茂駅に現在もランプ小屋が残っていて、稲荷駅のランプ小屋が加茂駅のものより古いと聴きました。はじめてランプ小屋なるものを知ったので興味をもち、参考までに以下の拾い読みをして、ついでの機会に見て来ました。

蒸気機関車が牽引する客車の灯りは、その当初は石油ランプを使用していました。それは薄暗く、とても読書はできないものでした。その後、電池を積んだ蓄電池車を連結して、やっと電燈が灯るようになり、次いで、車軸の回転を利用した発電機をつけるようになりました。石油ランプを使用していた当時は、夕暮れになると駅員が客車の屋根に登り、天井の丸いフタを開けて大きな石油ランプを差し込んでいくと、駅員の足音がミシミンと響き子供が怖がったそうです。

この石油ランプ等を保管する建物は、「ランプ小屋」（または「油小屋」と呼ばれていました。石油ランプを使用しなくなった後も、油脂類を貯蔵する「危険品庫」として、現在も使用されているものもあります。

前述のように、奈良線（奈良鉄道）の稲荷駅と、関西本線（関西鉄道）の加茂駅にランプ小屋が残っています。奈良鉄道は関西鉄道より後に開通したのに、稲荷駅のほうが加茂駅のものより古いのは、東海道本線開通のころのルートは、山科⇨稲荷⇨京都⇨となっていました。が、大正一〇年（一九二一）八月一日、山科⇨京都⇨に路線が変更されたので、奈良線のルートも開通当初、桃山⇨伏見⇨東寺⇨京都であったのが、山科⇨稲荷⇨京都になったからです。次頁の地図をご参照下さい。



【近代城陽の産業と交通】による

奈良線は、開通当初から現在と同じ路線を走っていたのではない。奈良鉄道として開通したころ、京都から東寺・伏見を経て桃山に達していた。稲荷経由だった東海道本線が、大正一〇年（一九二二）に路線を変更するにあわせて、奈良線も稲荷経由となった。京都・伏見・桃山間の旧奈良線は、貨物専用線として使われていたが、その後奈良電鉄（現・近鉄京都線）に譲られ、昭和三年（一九二八）の奈良電鉄開通によって、再びよみがえった。



▲準鉄道記念物に指定の稲荷駅ランプ小屋。駅舎増築のとき片側が縮小され、柱状の煉瓦積みを失っている。写真は建物の背面で、道路からの眺望。 1988-10

【月刊『鉄道ファン』1989年7月号】による

因に、「鉄道唱歌」も、「四五」「大石良雄が山科のその隠家はあともなし 赤き鳥居の神さびて立つは伏見の稲荷山」《四六》「東寺の塔を左にて とまれば七条ステーション 京都々々とよびたつる 駅夫のこえも勇ましや」となっています。

※明治一二年（一八七九）八月一八日稲荷駅開業。

※明治三〇年（一八九七）一月一日加茂駅開業。

白井茂信「赤煉瓦のランプ小屋アラディン建築」（月刊『鉄道ファン』一九八九年七月号所収）には、

|| 概略 || 現存する稲荷駅のランプ小屋は、イギリス積み。屋根は瓦ぶきの切妻。間口約三・四m、奥行約三・二m。竣工年月の記録が不明で建造当初の写真もないが、同駅開業当初からのものとされ、国鉄最古の建物という理由によって、昭和四五年（一九七〇）一〇月一四日に準鉄道記念物に指定され、現在は超ミニ博物館を兼ね、むかしのランプや腕木信号機、機関車の写真その他鉄道部品が展示保存されているとあります。

しかし平成一〇年一〇月一〇日、京都一周トレイル・東山コースを伏見稲荷山の一ノ峰（円墳）・二ノ峰（前方後円墳?）・三ノ峰（円墳）を巡り泉涌寺を経て清水

山まで歩いたときに、稲荷駅の駅舎に隣接して残っているランプ小屋を見ましたが扉も閉められ、全く読むことができない案内板が傍らに立っている、期待はずれの現状でした。

そして昨年九月二〇日、関宿・亀山城を訪ねたとき、加茂駅で乗り換えの時間待ちを利用して、ランプ小屋を見ようと思い、窓口の若い駅員に尋ねると、ランプ小屋そのものを知らないと言うので、あれこれ説明している。と奥から年配の駅員がでてきてその場所を教えてくださいました。

昭和六二年（一九八七）九月六日、平城ニュータウン文化協会「山歩きの会」で宇治田原から、大和の大峰山に對して北大峰と称された鷲峰山（標高六八五メートル）に登り、和束原山へ下ってその帰途に立ち寄った当時の鄙びた木造の加茂駅が、立派な橋上駅になっているのに一驚し、すっかり変わった広々とした構内のはずれにやっとならぶ小屋を見つけましたが、その建物も、今は無用の長物となり果て、JRの始発駅になったからか、ゴミの入ったポリ袋がその前にうずたかく積まれていて、とても写真に撮れません。

『加茂町史第三巻』に、写真と次の解説が掲載されています。

加茂駅のランプ小屋

油庫ともいい、車内灯などの石油ランプを保管。

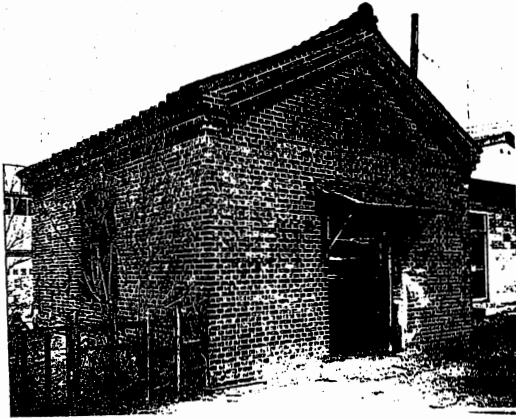
切妻瓦葺・妻入のオランダ積み赤煉瓦造で、明治三〇年（一八九七）一〇月関西鉄道建造とされる。

間口五・八m・奥行六・七mと大形の部類に属し、明治の赤煉瓦建築として貴重な遺構。

今日、SLは観光列車としてよみがえり、また各地の人目をひく駅舎は保存がはかられています。昭和九年（一九三四）一月建造の奈良駅の保存も決定しました。

それにひきかえ、日本に鉄道が開通したその当時の面影を伝えるランプ小屋は、今では用途もなく、見栄えもしないために、忘れられているのは少し残念なことです。

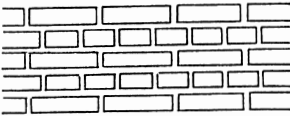
〇二・四・一六



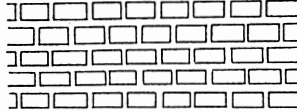
加茂駅のランプ小屋（明治30年）

【加茂町史第3巻】による

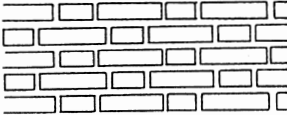
イギリス積み



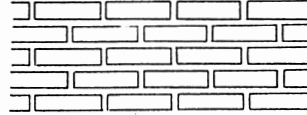
ドイツ積み（小口積み）



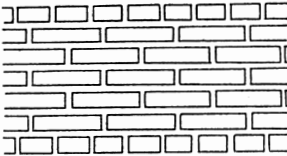
フランス積み



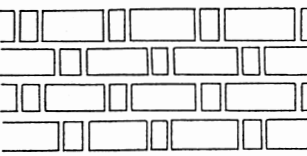
長手積み（半枚積み）



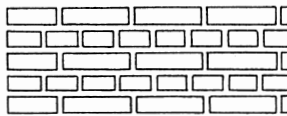
アメリカ積み



小端空間積み



オランダ積み



煉瓦の積み方

【日本れんが紀行】による

漢詩

片桐一夫

小子育英

久闊歸鄉遊故園

乍乖童幼舊朋言

共曾忘召戰東亞

小子育英芹水村

久闊きゆうかつ 郷に帰り

乍乖たちま 童幼もと

共に曾かつて召に忘じ

小子いくせいの 育英

故園こえんに遊ぶ

旧朋きゆうほうの言げん

東亞とうあに戦う

芹水きんすいの村むら

国是先

島嶼依然未返年

外交現實庶民拳

清官合起正当道

法益堂堂国是先

島嶼とうしよ依然として

外交げんじつの 現實

清官合まさに起たつべし

法益ほうえき 堂堂まさたり

未だいま返かえらざる年とし

庶民しよみん 拳こぶしす

正当せいとうの道に

国是こくせい先んず

“すかたん近衛兵” 嘆き節 (一)

繪内 正久

昭和二十年八月の終戦翌月に復員、元の職場にもどつた。東京本社に顔をだすと社会部にこいという。温情を断わり戦災にあわず “銀めし” が腹いっぱい食べられるうえ、貸し家がたくさん残っている地方都市をお願いした。東京の家は焼夷弾にやられ上野駅構内には餓死者が出はじめていた。北海道と北陸のどちらかといわれ、迷わず加賀百万石の城下町を指名した。これがわが身一生の不運の始まりだった。翌年、石川県で戦後初のメーデーが兼六公園で行われた。

意外や記念すべき第一回メーデーの議題に「反動記者繪内をA新聞社から追放せよ」という榮譽?をになわされた。のぼりをかかげて香林坊を行進の末、大会代表が追放決議文を支局で読みあげ決行をせまるといふ。そのころ私は石川県の社会、共産両党支部、教組、国労、自治労など左翼関係と学校教育方面の取材を担当していた。

当時の革新団体はマッカーサー元帥の覚えめでたく日の出の勢いで、意気すこぶる上がっていた。(人権と平和を旗印しとする団体らしからぬ仕打ちを食らわすとは何ごと) 憤慨したが知己のない土地へ単身転がりこんだよそのものだ。お国なまりで親しげに取材する他社より冷たくあしらわれるのは馴れていた。(それにしてもよほど議題に窮しているんだなァ) 鈍い頭をひねって追放される原因をあれこれ考えた。やがて思いあたったのが私の兵歴だった。

ある日、党書記局で代議士たちと雑談中に「君は軍隊で外地はどこじゃった」ときかれた。勤労者のほとんどが復員帰りだ。軍隊時代の思い出ばなしは肩のこらない社交術だった。私は軽く「近衛兵だったから終戦までずっと宮城のなかにいました」と答えた。とたんに一同の談笑がとぎれて顔がこわばった。以後、私は見る眼が前よ

り冷たく、とっておきの話を聞きだしくなくなった。そのころ東京の飢餓状態は深刻化し、都民がむしろ旗をおし立て皇居前広場で「コメ寄せ」の氣勢をあげようとしていた。進歩的学者や文化人と自称する人たちはそれまでの史観を批判し、天皇制を論じ天皇の戦争犯罪を追及しようと動きを強めていた。

彼らにしてみれば米軍占領下に拘わらず、忠君愛国の念にいまなお燃え続ける元近衛兵の残党がこともあろうにわが革新陣営の牙城に入りこみ、記者として情報を探るとは言語同断ふらちな奴と見たに違いない、と思ひ致つた。かくゆう私は今まで彼らにとり具合の悪い内幕をすっぱ抜いたり、よた記事をとばしたこと、極秘情報に探りをいれたこともない。A社に取材活動や記事で迷惑をかけた覚えもない。敏腕記者とか鬼記者と恐れられるほど切れ者でもない。まぬけな質問や突っこみ不足の取材などで、彼らも冴えない新米記者と承知のはずだ。とにかくわが社は戦前から左翼的中立の論調でインテリ層や学生の人気抜群で、他紙を大きくリードし世界のA社といわれて天下に冠たるものがあつた。自由と人権、平和と反権力を編集綱領とし、不肖わたくしも戦前教育の

衣をぬぎすて、民主主義とアメリカナイズを拳々服鷹の最中だった。

そんな盟友関係の新聞社に巣食う不逞の輩は追つ払えとなつたのだろう。と思う以外に理由はどうしても見つかからないのだ。晴天の霹靂、数日して私は支局長から転勤を告げられた。着任一年たらずで自ら希望した任地を追われる破目になった。上司の転勤命令に異をとなえたら以後、出世から見はなされる社の定め。県人ばかりの支局内に味方はいない。歓送会をしてもらえず関係先のあいさつもそこそこに、独身の身軽さ行李ひとつひつつかいて飄然と百万石の城下町をあとにした。その県人の支局長は「君がいては都合が悪い」とひとこと。県のメーデー実行委員会は早速、議題から私を追放するたれ紙をはがした。

たどり着いた新任地で私は兵歴をあかさないことを心に誓つた。やがて土地になれてどうやら仕事をこなし、新田封鎖の月五百円でなんとか食いつないでいた。豊かな農漁業地とはいえ、あかの他人に白い米をわけてくれる奇特な人はいないものだ。それどころか県から供出米を農家に懇請して歩く県供米委員に委嘱されてしまった。

これではヤミ米が買えない。ホンダワラ海草入りの黒っぽいパン、砂まじりの屑米をはき集めて粉末にした米粉を県食糧事務所長から密かにわけてもらった。それでも三年もたてば顔が広くなり友ができ気分がゆるむ。そんなとき地元紙の社長から「なにか随筆でも……」と声をかけられた。魔がさしたか思いうかんだのが前任地のメーデー事件。当地は保守の金城湯池、社長はその大物ということも油断をさそった。大内山の奥深く菊のカーテンの内側の秘話などよもやまばなしを書いたとたん、新聞社めがけて抗議が舞いこんだ。

「あんな悪人づらした奴が近衛兵とは嘆かわしい」仕事から方々へ顔をだすので多少は顔が売れている。私に覚えはないが先方はどこかで見知っていたのだ。

「あんなこと書きおって……敬語の使い方も知らんのか」「あれが近衛兵とは情けない。戦争に負けるはずだ」おしかりの投書が続々。確かに私ごととき縄文人的面がまゑは皆無だった。九段坂上の靖国神社の向かい江戸城田安門をくぐった近衛歩兵第二聯隊（戦時名東部第三部隊）第三大隊第九中隊の兵舎に入る前から（場違いなえらいところへきてしまった）と恐れと忸怩たる思いだった。

原隊の徳島連隊では普通寺師団に立ちより東京都立一中集合を命じられただけ。北の野戦行きとばかり考えていた。集合地で初めて「おめでとう。お前はきょうから近衛兵だ。歎べ」といわれて仰天した。（どうして私が……）これからの生活が、近衛兵の評判を小耳にしていただけに先が思いやられ怖くもあつた。

余談で恐縮だが近衛とは大君の近くにはべってご身辺をお衛りする役目の意とか。従って大和王権発祥のこの大伴、物部両豪族の子弟のなから武術に長じた弥生人的な眉目秀麗の若者を選んだという。五世紀の倭の五王時代。まだ近衛といわず中国軍制の名を借用した。埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣に「杖刀人」として二一代雄略天皇に仕えた榮譽を金象眼に。また熊本県江田船山古墳出土の鉄力に「典曹」として仕えた光榮を銀象眼にした豪族がいた。おそらく弥生人顔の好男子に違いない。それ以後と飛鳥時代は国司や郡司の子弟のうち武芸にすぐれた美青年に科挙の試験を施し、その後は従四位以上の子弟から厳選した。従一位以上は特例で無試験だった。兵制として成文化したのは大宝律令だが内容は全条散逸で未詳。純和名の近衛の字を用い、左右両近衛府となつ

たのは称徳女帝のとき。左近衛は紫宸殿前階段東側の梅の木（のち桜に改める）を陣座のシンボルに、右近衛は同西側の橘の木を陣座のシンボルとした。

金糸銀糸のきらびやかな衣裳に衛府太刀を帯び、矢を入れた鞆を背にした左右近衛の勇姿は、いま弥生三月の桃の節句のひな段にならぶ。その後院政が布かれ上皇や法皇付きの近衛は西面や北面の武士、滝口の武者と名が変わり宮廷の官女との恋物語が彩りをそえた。鎌倉時代以降は將軍の命令で衛士と改まり、旅費や生活費自弁で禁闕守衛勤務に長期出張と改まった。歌舞伎の「鳥辺山心中」は無聊な单身生活が生んだ悲劇だ。幕末には勤皇の薩長士三藩の武術に優れ和漢の学に長じ、官軍の軍務に精励した美男剣士を所屬隊長に推薦させ、御親兵と称して明治天皇東京遷都のその日から江戸城の警固にあたらせた。

明治七年、近衛の名称を復活、西郷隆盛を近衛都督に任じて近衛歩兵第一連隊は左近衛、同第二連隊に右近衛の伝統精神を受けつがせ両隊同位同列の兄弟隊として宮城北の丸に兵舎を構えた。国民皆兵の徴兵制になってから庶民にも近衛の門口をひろげ、思想健全、品行方正、

学術優等にして罪科なき壮丁を全国から選ぶことと改めた。社会運動が起き世の中が不安定になるや親兄妹の同一家族ばかりか六等親までの思想、犯科、近隣の風評、伝染性疾患、家系にまで調査の範囲を広げて厳選。これらの調査は暗黒政治の一面を示すと国民の不評を買ったが、軍は所轄の憲兵隊、警察署、自治体兵事係を動員して一年余の歳月をかけて徹底的に若者の素行を秘密裡に調べあげていた。

筆のついでにもう少し辛抱をいたぐとして、世人は一連隊を薩摩系、二連隊を長州系と噂し合ったが、たしかに日本列島を源平二派のごとく折半し、一県平均二百人ほどの候補者を選んでさらにふるいにかけ、最終的にはその一割ほどを両連隊に送りこんだ。入宮がきまると市町村長がわが町の名誉と祝いにかけつけ、歓送の駅頭には町の名士がずらりと顔をそろえ除隊帰郷となれば、町の名士への道が約束され、嫁の志願者、入りむこの口がなだれをうつ。ところが私は近衛要員の資格をまったく欠いていた。第一に現役の甲種合格ではなく、三乙の応召兵。しかも適齢検査を受けず学生の恩典徴集延期を二回も重ね、大学を出てA社に入社した昭和十六年に徴

兵検査を受け、その翌年徳島連隊に応召入営した老兵なのだ。胃潰瘍で加療中だったので即日帰郷と思いきや、軍医殿に胃潰瘍は病気のうちに入っと思ったら怒鳴られて終戦までつき合わされた。

復員後、同期と最後の徳島部隊応召兵は全員インパール作戦と沖繩で戦死ときかされ、運命のいたずらに絶句した。なぜ部隊全員が野戦行きとなって私だけがただ一人近衛転属を命ぜられたか、いまもってなぞだ。徳島は父の田舎だが応召前日に初めて訪れただけで今日まで一度も足を運んでない。そのとき父の実妹に会っただけ。

私が二十歳のとき赤貧のうち五十二歳で病死した父の話では、わが繪内家の先祖は平清盛お抱えの絵師で、清盛から繪内姓を賜ったという。屋島の合戦で筆を刀にかえて戦かったが、義経軍に負けて阿波に逃れ帰農した。幕末には蜂須賀藩の陪臣となり、勤皇倒幕運動に加わって明治新政府の士分の扱いに不満を抱いて反乱を企て繪内一族の三分の一が切腹、残り半分が北海道へ流され、あとの六家族だけ阿波にとどまった。現存する繪内姓は日本と海外合わせて十二家族。すべてが血縁だとA社定年の直前、電話帳をくって繪内姓を探しだし徳島と北海

道に電話して父の話を確認できた。おそらく私の近衛要員調査はしていないはずだ。勤皇の家系でも反乱を企て極貧のうえ、早く父が出郷して私の存在を知る一族はいなかったと思う。

長いこと道草をくったが、話を本題にもどそう。私の一文が読者をおこらせ、余波が怒濤となってわが身におしよせたことは前にのべた。「あいつをつかまえて、簀の子巻きにして海へ投げこめ」ぶっそんな話が有志の間でまともり、近く決行と新聞社長のせがれが注進してくれた。(やくざの仕置きでもあるまいに……)と思ったが身からでたさび。相手は必ず夜襲と見当をつけ、当分の間夜間外出禁止令を自らに課した。新撰組につけねらわれた勤皇の志士の苦衷がよくわかった。だがうまい具合にまもなく任期満ちて転勤となり、あやうく虎口をのがれた。遠く転勤先まで追手が馳せ参じることもなかった。二度あることは三度ある。一度失敗したら懲りそんなものだが、すぐ忘れるところが不肖私である。しかもあらしが襲ってきたのは禁闕守衛に輝く栄光の近衛歩兵第二聯隊が敗戦直後に解体されて、四十七年間もたつ平成四年だ。こんどは身内の戦友たちの全面的集いである近

歩二会の会員によるいっせい射撃だった。「さらば昭和の近衛兵」——この変てこな題名の本が、平成四年夏の私の著書である。百人一首の「みかきもり衛士のたく火の夜は燃え　ひるは消えつつものをこそ思へ」からとって「みかき守の火消えて」とでも、文学的な題名を考えてくれると思ったが教示しなかった自分の失敗だった。

しかし、この本が全国の書店でいっせいに売りだされるや、平積みという作家なみに本をうず高く積み上げて優先的に売りだす恩恵をうけてロングセラーになってしまった。無名人やタレントの著作は一週間ほどで返本となるか、一店一冊を棚に置いてくれるのがせいぜいだ。そのうえ定価千八百円という当時としては高値。売れ筋でも小説類は千円前後だった。出版社から終戦日の八月以前に出版したいといわれ、三か月間毎晩徹夜を重ねた結果老眼と白内障が一気に進んでしまった。買った人は

元二連隊の戦友や他の近衛連隊関係者、近衛連隊にあらがれを持った人たちがやはり主体だった。ことに元二連隊の隊員たちは、自分が今はなき日本帝国の栄光の近衛兵として生きたあかしにと大量に買いこんで、親類縁者や友人に配り末裔まで子々孫々の結婚、就職に便

ならしめようと余慶をねらったらしい。

私が執筆を思い立ったのは敗戦その日だった。大正の御代に生をうけ、わが帝国の輝く時代を知り、帝国崩壊の日を宮城内で見つめ、米軍空襲で豪荘なる明治宮殿および天皇ご一家の御常御殿おつねが一夜にして灰燼と帰した惨状を終始熟視してたこと、終戦前夜わが連隊が宮城内で反乱を起こし天皇に銃を向けた事実など語られざる国民の知らざる宮城内の秘史をすべてこの目で見てきたことを、歴史の現場に居合わせた一近衛兵として、一新聞記者としてさらに国民の一人として見聞のかずかずを後世に伝えねばならぬと思ったからだ。

出版してから一週間ほどはわが生涯最良の年だった。新聞の広告で知ったと祝いの電話、妻の友からは花束と、文学賞でも手にしたような心地だった。それから間もなくの早朝、電話が鳴った。浮き浮きと受話器をとると

「貴様は共産党カッ」

怒声が寝ぼけ眼の耳をつんざいた。東京の近歩二会の事務局長からの電話だった。

「わが隊の恥を書きたておって……どういう了見なんだ。それに大元帥陛下を呼び捨てにして許せん。みんな

もお前にそんな話はしとらんいうとるぞ……」

五十年前の初年兵以来、久々であびせられた罵声だった。電話口で反射的に不動の姿勢をとっていた。とっくに忘れていたと思つた軍隊生活の暗い私的制裁の悪の側面が私の脳みそに、こびりついていた。七十歳すぎて小僧っ子的ように怒鳴られたのはショックだった。記者としてたてまつられることはあつても、怒鳴られた記憶はない。だが下士官あがりの事務局長にどやされたのは、実はこれで二回めだ。初めは執筆を思いたつて、一応礼儀としてあいさつをせねばと思つて電話したときだった。

「いまさらなんで隊の恥など書くんだ。やめとけ」

相手は私の入営年月日をきいて「お前らに隊の長い歴史がわかるか」と偉丈高になった。近衛連隊の内務の規律は一般兵科以上にきびしく、天皇はじめ皇族、外国使臣、国賓の儀仗をつとめる関係で服のボタンが一つはずれていても昔の牢屋に似た営倉入りといわれた。一般連隊でげんこつ一発ですむところ、近衛では五発で顔がゆかむほどなぐるといふ。厳冬の雪の深夜、非常呼集であわてて営庭に出たら、盗み食いの一等兵を中隊長自ら水をはったドラムかんの中に裸にして投げこみ、上から頭

をおさえつけているのを見てその烈しさに震るえがあつたことがある。

事務局長の見暮に、しからば電話より直談判と翌日上京した。突返されるかと恐る恐るさしだした商品券の箱を手にするや、顔をやわらげた。

「おう、なんでもきいてくれ。資料ならいっぱいあるぞ……写真もな」きのうに変わる優しさに一驚した。さらに「なにを書いてもいいぞ。時代がもうかわつたんだからな」ものわかりのよさに再驚した。出版社でも「若い人にも読んでほしいと思つているので堅苦しい話ばかりでなく、くだけたのや面白い内幕ものもお願ひしますよ」と注文をつけられていた。出版後のえらいかわりようと電話口の見暮に三驚した。

「あんた、なんでも書いていいといつたでしょう」

私も強気だ。なにしろ商品券の件がある。軍隊の階級や年次がモノをいう時代でもない、彼もいつていた。

私の思わぬ反撃に驚いたのか、急におとなしくなつて電話がされた。執筆にあたつて私は全国に散らばる近歩二会の生存会員二千人のうち北海道から九州まで都道府県別、中隊別、入営年次別、職業別にわけ職業軍人を除き

二百名からアンケートをとった。宮殿炎上時と反乱事件当日に受けた命令、行動とその場所、同一行動の上官と戦友の官等姓名、行動に対しての所感、その他御守衛上番で感激した話などを中心とした。立哨中陛下にお声をかけられ泣きだした兵や現天皇に幼時銃を貸せとしがみつかれ、また相撲をとろうとせがまれた話。宮中の祭祀のたび紅白まんじゅうや赤飯、皇后お手製の年越しそばを賜ったこと、お散歩中の陛下に捧げ銃の礼をしたが規定の三十歩手前から五十歩前で銃を捧げてしまい、腕がつかれて泣きべそをかけたなら近づいた陛下に大笑いされた話。吹上御苑で野草の花を一輪ちぎったら宮内省を通じ陛下からご注意があったなど数々の秘話が寄せられた。

また別に年二回発行の会の機関誌「たちばな」の投稿から引用する許可を事務局と本人から得ていた。投稿には「恐れ多くも」「畏くも」「竜顔いと麗しく」「遊ばされ」「みそなはされ」「恐懼感激」「感涙にむせぶ」「大元帥陛下」「現人神あらひとかみ」「八紘一字」「大東亜共栄圏」など今はタブーとされる語句が踊っていた。これらの字句はA社の皇室用語集と現代当用漢字に改めた。書きあげた原

稿は出版社に手渡す前に事務局長へコピーして宅配便で送った。間違いや不適切な文言の指摘をお願いしたが返辞はなく、目を通した様子さえなかった。

発売から十日ほどして、留守中に高名な日本近現代史の大学教授で著書や論評のある先生から電話をいただいた。未知の著名学者だけに誤りの指摘かと心配したが、再び東京から電話で先生に謝辞をいただき恐縮した。「近衛兵の秘密の部分がよくわかった。終戦時の二連隊の行動を知ることができた。近代史解明に大いに役立った。私の著作に引用したので許可してほしい」とのことばに感激した。また商売仇であるはずの読売新聞社から拙著を土台に、終戦直前のわが隊の宮城内における行動を三日間にわたり、上中下三回に分けて全面特集記事を組みたいと同東京本社幹部から電話があり、取材責任者がわざわざ拙宅まであいさつにきた。

三年後、終戦の日を中心に読売新聞社では、北海道の辺境に変名して隠れ住んでいた私たち中隊が所属した元第三大隊長を探しだし、私の裏付けをとって紙面に飾った。しかしその年末に印刷された近歩二会機関誌「たちばな」で、私は集中攻撃を受けた。「近衛兵にあるまじ

き思想の持主」「二連隊の恥」「あの社の記者らしい書きぶり」など戦前の愛国青年のままの純情を烈しく私にぶつけていた。その翌年開催の全国大会でも、終戦前日私に宮城占拠の先兵行動を命じた別の元大隊長がその事実を全く否定する講演をし、満場の喝采をあげた。私の顔を知る会場内の元将兵たちは、私を見て抗議するでもなく、「やあ」と手をあげ昔に変わらぬ態度で接してくる。私が所属する大阪支部では直後に出版祝賀会を催し、「わしらようわからんが、あれでいいんだ。気にするのとあらへん」と肩を持ってくれた。執筆あいさつでも支部役員らは「悪口でもなんでもかまへん。なんでも書きなはれ」とはげましてくれた。

だが私を知らない九中隊以外や終戦時に在隊していなかった昭和十六年以前の古年次兵は、不満や不快感を見せて支部総会で酔いがまわるとこねだした。翌々年の定期総会の宴席で隣に座った初めて見る御老体が例によって「お前はアカか」と、私の弁解を全くききいれず、そのことばのみくどくどくり返すので逃げるにしかずとそのまま一滴の酒のまず退散した。以来支部総会、役員会にはいっさい欠席ときめて七年近くなる。役員や戦友

からその後「顔を出せ」とお誘いもなく、すっかり疎遠になってしまった。しかし年会費の徴集通知だけは届く。とにかく老齡者ばかりの団体で新会員募集とはいかず、年々病で倒れ死亡者が出て補充がきかない。先方も異端者といえど会員に名をつらね、金さえだしてくれば御の字なのだろう。

思えば半世紀近い前、任地金沢で革新の人びとに極右の保守反動とレットルをはられて追われ、堅固な保守の地では危ふく簀の子巻きにされかかった。いまはまた同志、戦友と固く信じた同じ釜のめしを食べた仲間にわが真意を疑われ、絶縁同然の境遇。ふたをとじて自ら貝になってしまったのは顔や言動、素性から不似合いな近衛兵にされてしまったばかりの災難といえなくもない。すかたんなる故に身からでた錆というべきである。といっていまだ近衛兵にされてしまったのを嘆き怨む理由もない。それどころか草莽の民が斉しく仰ぐ宮城のなかで、二千年目に初めてともいふべき歴史の瞬間をはからずも目撃することができた。もちろんそれは大日本帝国崩壊の一大悲劇であったが、激震する歴史の現場にはからずも立会う生き証人になれた事実は、国民として一記者と

して筆舌につくせぬ幸運と荣誉であつた。

百二十年前、薩長政府によって自刃と流罪に処された貧しき勤皇一族繪内家の半数ほどが、文明開化の近代日本を見ることなく憤死した。そのかわり末裔の一人の私
が帝国倒壊と孤々の声をあげんとする民主日本誕生の一瞬を、一族を代表してしっかりと臉に刻むことができた。

性来のずっこけが真人間に豹変した一瞬、その場所は二重橋の橋上のまんなかだった。そのあたりは緒戦の相次ぐ勝報のとき、広場に集まった祝賀の行列に提灯を打ち振りこたえる橋上の人がいた。だが八月十五日正午すぎから茫然自失、目標を失い無念の民草たちが続々と宮城前広場に集ってきた。彼らが涙で見上げる二重橋上には赤子を慰め、力づける姿が一人も見えなかった。わらにもすがりたい思いの彼らの心のよりどころにでもなるなら——不肖の私がとりあえずこの大群に勇氣を与え、祖国再興を互いに誓い、力強く第一歩をとみにきょうから踏みだそうなど思いつくところがやはりずっこけである。本人はいたって崇高な気持ちである。不動の姿勢で眼下の広場を埋めつくす人たちに慰めの念力を送っているつもりなのだ。橋下の蛤濠の水は青く澄みきって、石垣

上の松の緑は八月の太陽に涼しげに映え、背にした伏見櫓の白壁は清らかだった。いつかきょうの壮麗なる宮城前の風景を笑い話で語られる日がくるだろうか。やがて夕陽が吹上御苑の森の中に沈もうとしていた。宮城前広場に参集した都民の姿もまばらになった。長時間の不動の姿勢は、陸軍始めの代々木原頭の観兵式ですらとり続けたことがない。正気に立ちもどつた私がまっ正面から日本国民を見つけたのは、この日だけだったように思う。正門櫓わきの守衛隊指令部正門儀仗衛兵所にもどつたとき、終戦第一夜の闇が宮城をすっぽり覆いつくそうとしていた。やがてまた私はもとのずっこけ兵にもどつていた。その夜九時すぎ近衛師団指令部の命により、いまは賊徒となった近衛歩兵第二連隊第三大隊の将兵は、交代衛兵の到着を待たず大和王権発祥以来の禁闕御守衛に穴をあけたまま、宮内省横から蓮池濠を右に見て乾門を退出した。第二連隊最期の下番衛兵は私たち第九中隊だった。その夜第二連隊出身阿南惟幾陸相が自刃したほか、連隊長が即日解職されただけ。行動に参加した将兵にとがめはなく、以後解隊となるまで二度と宮城・賢所御守衛の上番の許しはなかった。

(次には皇居炎上と反乱の思い出を書いてみたいと考えております)

一期一会

内田由男

一期一会とは、一生に一度の出会いということですが。

茶の湯の心では、何回会ったことのある人でも、この日、この時、出合うということは一生に二度とはないことであるから、その時、その時の出会いを、大切に、心してもてなさいと教えています。茶の湯にかぎらず佛教でも、この言葉はよくつかわれていますが、その心に変わりはないようです。

私は今年喜寿を迎えました。七十歳の現役の頃までは仕事のこととか、社交的交際の毎日で、哲学的思考などまことに疎かであったと思います。

平成九年、平城第二団地へ入居しました。今までは自

分が老人でありながら、老人会の存在には殆ど無関心でした。偶々、謡曲の会で知合いとなった奈良市万年青年クラブ連合会々長の藤井義治様が、「第二団地には多勢の高齢者の方がおられる。皆さんの為には是非老人会をつくってくれ」と熱心に勧められ、その熱意にほだされ引受けることになりました。

平成十年十一月結成、当初の会員は三三名でした。三年半経過した現在、会員数は九〇名と三倍に増えました。

現在では皆さんが仲良く、生き生きと楽しく暮しておられます。九〇歳を過ぎた一人暮らしの女性の方でも、カラオケとか、ゲートボールなどにも参加され、こんな楽

しい余生は思っていなかったと喜んでくださっています。私自身も老人会のお世話をしながら、少しも苦に感じたことはなく、かえって多くの方々と巡り合へ充実した日々を感謝しながら暮しております。多くの方が万青クラブを通してお互いに知り合いになり大きな連帯の輪ができました。色々と催しを行います、皆が和気合々と協力

してくださること、老人会を結成したこと本当によかったと喜んでいきます。藤井様と知り合い、そのお陰で多勢の老人会の皆さんと巡り合うことが出来たこと、すべて一期一会です。人との出合いに感謝し、少しでも社会の為になれるようその心を大切にしたいと思います。

写真の技術と感性

寺 嶋 りくお

カメラがブームのようです。奈良の観光地はどこへ行っても、いつ行っても三脚を下げたカメラマンが列をなしています。

先日、平城東公民館の主催行事で、一眼レフカメラの

初級写真講座を企画し、市民だよりに募集を掲載しましたら五十四名の応募があり、全六回の主に技術面の講習を終へましたが二〇名がフォトクラブとして残られました。

講義の多くは、カメラの取扱説明書をよく読めば書いてあることですが、人はあまり読まれないようですし、それを講習会で解り易く説明しても「難しい」と言ってお棄する人が多いようです。

残られた二〇名の人は、これからも初級の復習をしながら中級へ進もうとする意欲のある人だと思えますが、ことほど左様に、何事につけても努力する人は少ないように思います。

最近は、カメラもフィルムも良くなり、一眼レフカメラでもシャッターを押せば写りますが、人より良い写真を撮るためにはカメラの機能を理解し、使う技術を覚える努力をしなければ良い写真は撮れません。

写真は、絵画と同様の芸術だと、私は思っています。

芸術には技術以上に感性が必要です。美しいものをみて美しいと思うのも感性ですが、そのどこが美しいのか、その美しさをどのように表現すれば自分の感動を人に伝えることができるのか、と考えることが、より鋭ぎ澄まされた感性です。

人は始めから感性を持っているわけではありません。生きている中で生み、育て、生活の中で失ってゆくのです。だからこそ、より多くの作品を見、好きな写真と同じ所同じ時間に行って写して見る。その上で自分ならこのように写すという工夫をすることが感性を育てることなのです。

写真の三要素は、ハッキリ（鮮明）、スッキリ（整理）、ドッキリ（感動）と言われます。ハッキリは技術。ドッキリは感性ですが、スッキリは、ファインダーをのぞいた時に不要な所を除く。このことから写真ではシャッター

を「押す」ではなく「切る」と言います。

私自身、技術はまだまだ、感性はもっとまだまだですが、生涯で一枚でも良いから「これだ」と思う写真を撮りたいものだと思っています。



高松塚発掘三十年に因んで

——被葬者に捧ぐ七首——

網干善教

飛鳥野に眠る壁画の鮮やかさみそとし三十歳過ぎしも今に生きけり

薄暗き壁にのこりし彩りは千歳ちとせをふ経るも主を見守る

金箔の星座の下に納めらる名高き人は誰そありけり

その人の名を知りたきもなお知れず願い叶ふはいつの日なるや

葬はふりける人誰なるや知りたきも供ふる花にはかなき思ふ

知りたきも知る由もなく黙しいる高松塚の主は誰ぞや

過ぎし日の憶いを抱き集いけりみそとし三十歳ふ経る日高松塚に

猫を飼う

荒居智子

猫を打ち熱き手に呑む寒真水コップの中のカルキ苦かり
誤字のため丸めて棄てし便箋の舞い戻りいて窓に三日月
猫抱けば髭より伝う静電気頬突きて内なる痛み_にいたる
二合の米炊けて凜夜の糧となるアフガン難民今宵の糧は
青年の広げる足の間にてよろめき_ている京浜急行

白川郷

大浦小枝子

水底に沈む運命_{さだめ}もはねかへし命のかぎり咲く莊川桜よ
白山は未だ冠雪のこしるて白川郷の流水は澄む
天つ神に家族_{うから}の幸を祈るごと合掌造りの大屋根は立つ
囲炉裏にて燃やす薪の煙満ち茅葺きの屋根半世紀は持つと
新緑は天の青さと湖の青二つに分けて照り輝やける

ヨーロッパ旅行

岡田越子

大英の彫刻見れば疲れ忘れ首をのばして高き天井見る

四時間もバスで乗りゆくフレンツェへ黄のえにしだの延々とつづく

宏大なるベルサイユ宮殿各部屋の彫刻華麗にどぎも抜かる

ビール飲みイタリヤ民謡聞きながら手をたたく夜のカンツォーネディナー

ナポリの空晴れ渡りつつ海に映ゆ「さらばナポリよ」と口ずさみたり

元寇戦の始末

片桐一夫

博多湾覆い襲い来る元船に雄猛おたけび向かうは九州の武士

元兵の上陸戦法武器も勝すぐれて迎撃は苦戦くせん乱闘らんとうわが軍敗退はいたい(以下、旋頭歌)

元兵は叩き潰せの鎌倉かまくら厳命げんめいわが命明日あしたが限りと大宰だいざいの戦將

その日の夜勝よに奢りて湾外わんがいに退く元兵は大風波おほなみに溺おほる文永ぶんえいの役

六年後またの元寇わが軍奮戦ふんせん元船は大暴風おおかぜに沈しずむ弘安こうあんの役

言靈の幸はふ国

木庭和子

奥美濃のうすずみ桜咲き出でぬ風光る大和薬師寺の庭

「ひとりよがり」「くどき上手」と言靈の幸はふ国や銘にて酔はする

天平の如来に捧ぐテレマンの絃の音冴ゆる奈良博ホール

腕とれしマイセンの人形つなぎゆく埴輪復元の気分となりて

遅れ咲くエンゼルトランペット木枯らしに揺れつたくまし、其処だけは夏

帰らぬ日日

玉置小代

幼き日登りて遊びし故里の山は緑に吾を迎へくるる

三里山ながめつ幼な日語り合ふ母なき居間に法事を終へて

ことごとと山路を煮る厨べに春の香たちて故里を想ふ

羽もまだ生え揃はぬに鶴の番ひ楡の小枝に嘴合せるる

すこし濃くルージュをひきて文化祭に友らと踊るオーシャンゼリーゼ

追憶

寺嶋 りくお

暑き日は縫ひもの置きて乳房上げ汗拭ひるし祖母憶ひ出づ
兄弟のそれぞれ鈴りんや鉦かねを持ち経きょうを詠よみをりうら盆の夜は
町会の祭り仕切し角帯の父の姿を憧あこがれてゐし
小柄なる母が得意の男舞 幼な心に憧れて見し
ひたむきに「梅にも春」を踊る姉 市松いちま人形の如き眼をして

赤いひざかけ

中川 都哉子

「在りし日のまま」とうコヒーの寂しさよ司馬遼太郎の書齋は無
主なき書齋の椅子にふうわりと赤いひざかけ陽を浴びている

(司馬遼太郎記念館)

「モンゴル」とか「草原」とかの言葉さえ郷愁をよぶわが遣伝子よ

めらめらと音するほどに夕陽燃え見知らぬ少年に「ごらん」とささやく
玉ねぎの皮拾い食ぶ幼児あり 記者は短く「生きろよ」と書き

(アフガン難民キャンプ)

牡丹芳はし

馬場 恭子

花開き花落つるまで二十日とふ牡丹芳はしき満ちて酔はしむ
ひそやかにつぼみつけるしが昂然と今咲き匂ふ牡丹の大輪
二三片の花弁重なり牡丹散るあてやかなりし庭いまは静けし
整然と街道に並ぶドイツの家は窓辺にみな赤きゼラニウムの花
雪けむる稜線に抱かれ静かなりどこまでも続くアレッチ氷河

水無月憂愁

松村 せつ子

突然に姑の訃報の電話受く庭のあじさい色づきし朝
健やかな姑に会いしは三日前九十歳の生命消えゆく
姑の顔看にゆくことも無くなりて空白となる土曜日の午後
にぎやかに九人家族が暮してた夫の生家は弟ひとり
弟は半世紀前の写真見て家族の存在確かめている

秋 桜

森 田 陽 子

檻の中にコンドル高く留まりて見上ぐる空に 秋茜さす
秋桜咲き継ぐ道を東海道めざす夫のリユック消えゆく
たてがみをなびかせ駿馬花野駆く二〇〇二年に光あれかし
慶州の空の青きを憶う日の飛驒やまなみの山脈 雪の 光れり
「別れる」と禁句告げたる苦しみを秘めたるひとに夕桜散る

愛しき日々

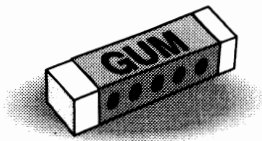
安 田 和 子

初春や飾りの馬の年賀状は夫の友なり恙はなきか
常日頃弱よわし子はトウシユーズはきすつくと立ちて白雪姫を舞う
御影堂は緑の淵に鎮もりて和上のお像灯ともしびと坐す
司馬記念館時空(司馬遼太郎)の旅人この国を愛いし心しづしづと満つ
目は刮と腕に血管ふくるる法華堂の執金剛神しんわされど美し

チュウインガム

棉源 瑛

しんしんと寒さ肌に迫る夜を疼く脚撫て独りわびおり
手袋の落した片手その末路残りし片手にまさるあわれさ
リハビりに手指馴らすと折紙のツル、うま、ネズミ並めて見飽かず
下着みなズリ落ちお尻まる出しのままに園児がバスに手を振る
なにとなく思い出しけりそのむかしリグレチュウインガムというのがあ
りき



芸術のお話

梶野 哲

文化と芸術

最初、地球という無機物質上に有機的生命が生まれ、進化の末に人類が誕生しました。原始時代の生活は、自然との闘いの中で様々な変遷をしました。狩猟漁労の放浪生活から牧畜生活を経て、集団で定住して農耕生活を始めました。生活経験によって、食べ方や住み方等生活方法が変化し、地方独特の新しい社会慣習、行動様式が生まれ、技術が発達し、文明社会が形成されました。更に、理想の価値を求め、言語、宗教、道徳、芸術、科学等様々な、文化という、精神活動が営まれました。それは生物学的形質の様に遺伝されず、親が子に教えて伝える模倣的学習で、次世代に受継がれて来たのです。

宗教と芸術

古代の人達は、厳しい自然の中での安泰な共同社会の

為に、神という偉大な超自然的保護者を創造しました。豊作祈願の為に、供物・宴・踊等の祭で鼓舞しました。後世には、神仏彫刻、曼陀羅等の神仏画、祭壇や社、衣装等を集めて、今の様になりました。私も理事を勤める春日若宮御祭は、大和の芸術を集大成した、大祭です。日本で最古の神社と称せられる、大神神社の御神体は三輪山です。その御山の前に拝殿があります。もし此の立派な建造物が無ければ、拜む気持になるでしょうか。仏像の光背は傘ではなくオーラです。彫刻では表現のしようがなく、円板、船形と苦勞しています。仏画なら彩色表現出来るのに大抵、彫刻を真似て描いています。信仰心が乏しいので、オーラが見えないのでしょうか。ところで、大仏像を後方の天井から見下ろした写真は、初めて新聞に掲載されました。巨大像に造った意味は、見上げて拜む為なのに、無理解な行為です。普通、人は

仏様を想像出来ません。仏様の像に対面してこそ、その奥に仏を念じる事が出来るのです。それを、仏像でない唯の立体物に見せることは、芸術否定どころか、宗教の冒瀆、信仰心の衰退に影響しないかと、心配です。

道徳と芸術

道徳は、法律の様な、違反すれば刑罰という、外的な強制力を使わず「人として考え、行わねばならない」と属する社会が定めた規範として、族長から皆に、親から子へ代々教え伝えて来た、心の内面の拘束訓なのです。故に、教え手と学び手により、守り方に若干相違があります。中には、昔の修身「君に忠に、親に孝に」の様に一括強制して、道徳を逸脱した例もありました。道徳は法律の条文改定程は明確ではありませんが、時代と共に変わります。昔は、年老いた親の面倒は子が見ました。今は、子育ては親の義務でも、親の世話は介護士の仕事なので、「親不幸」と非難しなくなりました。生活が変わると、芸術も変わりますが、道徳とは違って、内なる心を解放するのです。論語の「七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず」は、恰も芸術の心境の様です。

政事と芸術

政治は、元は、祭事ですから、祭政一致で、宗教と芸術と政事は一致し、調和していたのでしよう。其れが、権力者と神職と工芸職人に別れた時から変わりました。後世、最も対立したのが、明治の神仏混交否定と廃仏毀釈で、先頃のアフガンの石仏破壊も相似しています。

この様な芸術破壊と違う、芸術利用の例が、昭和時代の戦意高揚の為の戦争画や軍歌の強要です。然し、当時、芸術を志す人は、譬え謳い文句が「神の為」であろうと先頃の自爆テロ同様、特攻隊等の死の賛美は、芸術の心「生きる喜び」と相反する行為であり、強制されて、技術のみを提供した場合は勿論、自発的製作品も、決して芸術には成らない事を、知っていたに違いありません。今、叫ばれている国旗と国歌も、芸術の政治への利用策ですが、命令や罰で政事に役立ちません。感動と愛が芸術ですが、元々、他には利用が出来ない事なのです。

科学と芸術

湯川秀樹先生が「真理を示す公式は美しい」と言われた「美」は、芸術的感動に似てますが実際は違います。

十分な専門知識がなければ、その数式の意味を理解する力がなければ、自分自身その研究に没頭してなければ、決して感動する事はないでしょう。研究に関わる日常的苦労も含めた感慨を込めた複雑な人間的感動なのです。だから、研究に無関係な一般人は、即感動出来ないが、式の意味を教わり、気持を察する事は出来るでしょう。それに対して、芸術的感動は、個人の主観的感動であり乍ら、人間共通の感性による普遍的感動になるのです。

話は変わりますが、植物分類学に使う図鑑の図の様はポタニカル・アートや、鳥の外形を正確に模倣彫刻するバード・カービング等は芸術と紙一重ですが、表現ではなく模写であり、元々製作目的も違っていました。唯、植物標本の押花も当初の目的を改め、展示用に額に入れたり、心を込めて創れば、芸術に成るかも知れません。

格技と芸術

格技は、元々は競技ではなく、武闘の技術でしたが、死闘にならない様ルール規則されました。その違いで、槍術、柔術、拳法、相撲等が出来、人生修行と結びつき剣道、柔道、空手道、合気道等が出来ました。外国から

フェンシング、ボクシング、レスリング等も来しました。これらは勝敗を争う組手が主ですが、攻撃と防御の基本技を組合せた「型」の演技を競う種目も出て来ました。水泳や陸上競技等は、勝敗認定を、泳力、走力、跳躍や投擲力等を競う事に限定しました。球技は、競う相手と間にボールを介在させ、競技ルールを工夫して安全性を高めています。新体操競技、フィギュア・スケート競技等や社交ダンス競技では、技術点以外に、芸術点として感情移入を評価しています。相当、芸術に近い訳です。ところで、スポーツの語源は「暇潰し、余暇の善用」で「闘争」と余りにも掛離れています。何故でしょう。

モーグル・スキーマの角皆優人監督は「極意は、考えて滑らず、雪に光を見て無心に滑る。『矢は、射るのではない。弦が絞られ無念無想で、的の光が見えた時、放たれる』と弓道の達人が言われた様に」と話されました。ロック・クライミング・クラブの福井金治会長は「私は遭難した事がない。山のオーラの色で嵐の予感を得た。昔は誰でも見えたが、今の人は多忙で心を亡くしている。山で樹や小鳥を愛し、絵を描きたい」と言われました。

娯楽と芸術

難しく考えず、時々を楽しめれば良いか知れませんが、芸術とは似て非なる、暇潰し、娯楽では困るでしょう。TV・クイズ、お笑い馬鹿騒ぎ、人権度外視の駄洒落や犯罪紛い無頼卑猥の浮気暴露番組、パソコン・ゲーム、パチンコ、マージャン、競馬、競輪、競艇、宝籤、T O籤、動物漫画映画や巨大な怪奇映画パーク、更に、メジャーの下請になったプロ野球や、筋書きを迫真的に演じるプロ格闘劇も、元はと言えばコロッセアム奴隷の見世物の成れの果て。サポーターやフリーガン等やらせも含めて只の野次馬。極付は「世界は直ぐ滅びると占師が予言したから、東京にカジノを造ろう」と言う都知事、「人間の本性救済の為に、大阪にカジノ」との大阪商大学長の妄想提案です。酷い不況なのに何故、賭金の儲け等泡銭で釣り、大多勢の人が破滅する様な博打を、特に推奨するとは、責任ある人の発言なのか全く疑問です。芸術は想像と思索が必要ですが、娯楽には不要です。芸術の喜びは一生ですが、娯楽は如何に興奮しても、刹那、過ぎ去れば終わりです。もし残れば後悔でしょう。

芸術と商売

芸術と称して、一般の人が共感出来ない、日本人が誤解される様な、異常心理の映画が受賞するグランプリ、その他の奇妙な芸術賞、巨匠に始まって、爵位は廃止の苦なのに画伯、矢鱈勿体ぶった重要無形文化財保持者、生きていのに人間国宝とは吃驚仰天。スポーツ新聞の神様仏様稲尾様や金田天皇に匹敵する洒落と思いきや、真面目な称号とは呆れます。大袈裟に奉るのは、名譽欲を満足させる為、箔付けて商に利用させる為でしょうか。

芸術院賞や文化勲章受賞の為、大芸術家なる方が審査員に巨額の献金をし、受賞の時「凶らずも、私如き者が受賞の栄感謝申し上げます」と言われたのに驚きました。自作の売値が下がると、価格維持の為に、知人に大金を渡して、購入して貰っている由です。安値札で売れず、高値札に変え急に売れた話もあります。よろず骨董品売場の自称本職が付ける値も、競市の値同様出鱈目です。セザンヌやゴッホやゴーギャンも生前は殆ど、画商に相手にされず、全く売れなかったそうです。下手くその素人画家所謂アマチュアでした。この様にプロもアマも作品の値段も骨董価格も、芸術的価値とは無関係です。

芸術と天才

芸術は「天才が、創作する」という説が正しければ、鑑賞教育は出来るが、創作教育は、無意味になります。先ず誰が「天才と名付ける事が出来るのか」疑問です。現在、近代絵画の父と崇められているセザンヌも、天才と言われるゴッホやゴーギャンも、生前は、奇人変人狂人等と蔑まれ、展覧会には落選ばかりだったそうです。

ところで先述の様に、芸術も文化ですから、遺伝ではなく、生育環境や教育など後天的影響によるとしても、原始時代最初の芸術は如何かと疑問が残ります。そこで「誰でも天才だが契機と努力と継続で開花する」と考えれば、凡そ納得出来るのではないかと思われるのです。

芸術と技術

芸術は「心の表現だから教える事が出来ない。教える事が出来るのは、技術」と言われます。それでは、何も考えず命じられるまま親方が造った陶器の原型を真似て大量生産出来る様になっても、芸術としての陶芸創作が出来るでしょうか。又、他人が描いた輪郭ぬり絵を、熱心にしても、挿絵や肖像画や絵手紙や俳画等の画一的な

技法の通信教育を受講して、技術だけ上手になっても、不思議に、却って芸術の世界から離れてしまうのです。

それから、よく間違えられるのですが「芸術に於いて上手とは、思い通り、イメージ表現が出来る技」です。

他方、音楽の絶対音感や発声術、書の手慣た筆捌き、絵画の対象描写術、舞踊の跳躍回転、料理の包丁捌き、建築造形の道具使い等は「プロ職人の術」のことです。

描写と表現

同じ芸術でも、描写・写実・写生・表現と制作態度や制作方法に違いがあります。描写とは、物体の表面的な計量質を正確に観察し、出来る限り忠実に描く事です。

写実は、セザンヌが「本質は、円筒・円錐・球だ」と言った様に、表面に惑わされず、実在を捉える事です。

写生は、対象の内なる生命を感得し、表わす事です。表現とは、体験し感動した、イメージを現す事です。

以上は、絵画や彫刻等、造形芸術の事と思われませんが、文芸や音楽や舞踊や演劇の制作過程でも、同様な内容の違いがあります。この様に、無意識でなく自覚する事が出来るし、芸術について本質的に考える事が必要です。

美術と工芸

工芸は「用の美」とか、デザインが芸術とか言う様になってから、誤解が生じました。「実用で有ろうと無からうと、美しい作品は美しい」のです。他人の注文で、仕方なく製造せざるを得なかったものや、自分自身の気持を込める余地が無く、型通り作ったものが芸術作品である筈がありません。然し、心から対象に惚れ込んで、デザインしたポスターは、芸術でしょう。然し、実用を徹底追求し工夫を凝らして、使い易くした製品だから、芸術的価値が高いという理屈にはならないと思います。観点を變えて、純粹芸術という絵画、彫刻、音楽、文芸等、何の役にも立たないと言えるでしょうか。昔、日常使用していた道具に骨董品、民芸品と名付け、専ら鑑賞の対象にすれば実用で無くなります。「芸術は、効果を目的とせず、人の心に自ら作用を及ぼす」のです。

書道と音楽

書は「絵画の様な空間芸術に見えますが、実は音楽の様な時間芸術でもある」のです。生命のリズムを書では墨の掠れや滲み等の線質等で表現し、音楽では音の強弱

音質で表現する様に、一方が視覚的時間芸術、他方が聴覚的時間芸術なのです。この事は文部省の教育学の専門家でも解っていない様なのです。それ故、見栄えし読み易い字を書く事を目指す毛筆書写や硬質習字という教科を設定したと思います。これでは、実用の形ばかり重視したレタリング風の字が書ける様になるだけです。それは、鑑賞についても言えます。一度に、全体を観るだけで終わっては、丁度、音楽譜の音符の音を一度に鳴らしたのと似ていると言えはお解りになると思います。最初の入筆から筆順を辿り強弱のリズムとハーモニーを体感しなければ、感動することは出来ないのです。ところで、音楽のテーマは、聴き終わって感じますが「書は、書かれた言葉の意味も解って感じる」のです。言語と文字の総合芸術だから、何を書くかが重要です。又、鑑賞対象としての襖や掛軸等の作品に完成する為に制作しながら、字の形や構成を考える必要があります。それから、書道の「道」は人生修行の意味で、書に励み生き甲斐を求め、豊かな人生を極めようという事です。

ある明治人の日記より（終）

繪内正久

（ある明治人南良吉の天津事件裁判の日記は判決にいたる前段と最後の記述がなく、犯人津田三藏の最期にもふれていません。私の独断で彼の日記の前後に、「前段」と「後段」として、結末をつけました。お読みくださる方への参考としました）。

〔前段〕

津田三藏はなぜロシア皇太子ニコライに斬りつけたのか。彼は明治十年の西南の役に、巡査として官軍側に加わり西郷隆盛軍と戦い負傷した。彼は数種の新聞を自宅や署内で精読し、政治に興味を持ち世事に通じていた。上司や同僚は「沈着冷静で胆力あり品行方正にして勤務はまじめ、公衆に接するに温順。儉約を旨とし貯金がすでに四十余円にのぼる」という。

当時の人はニコライが来日にあたり、まず東京を訪れ

て明治天皇に拝謁すべきなのに長崎に上陸した点をあげた。皇太子は上陸した足で、稲田お栄というロシア語を操るラシャメンと一夜を共にしたという。色白で肉感的な愛嬌のある美人で、ロシア海軍の高級将校の間で評判の女性だった。さらに皇太子の訪日は東アジアの太平洋岸に良港を求めて、ロシアが敷設したシベリア横断鉄道の開通式に臨むという名の下に、日本の国内情勢を視察にくるといふ噂が流れていた。当時弱国だった清国や李朝の朝鮮半島にロシアの根拠地が出現すれば、わが国にとり大きな脅威になる、と警戒する論議が朝野に高まっていた。

三藏は凶行後、直ちに現場近くの天津署員の家の土蔵に収容された。監獄医が彼の傷の手当てをしたが、「きわめて冷静で取り乱した様子はなかった」という。駐日ロシア公使シェービッチが、同夕枕頭で尋問を試みたが

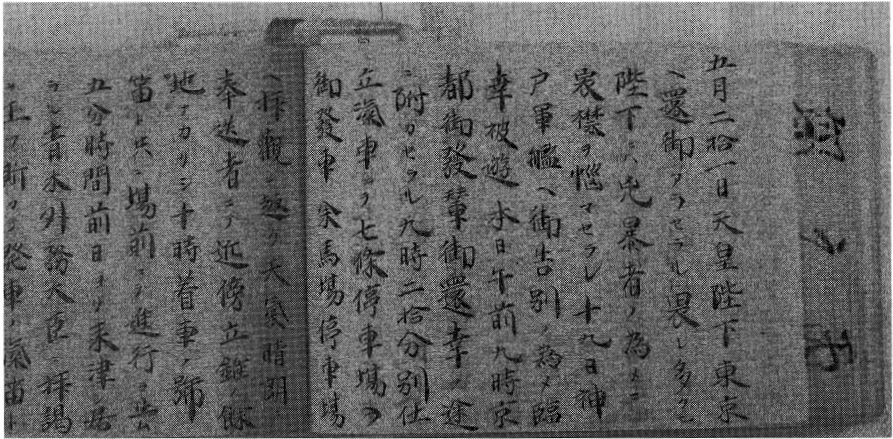
「某は元伊賀藩藤堂和泉守様の家臣」と答えただけで、あとはいっさい黙して語らなかつた。当日朝、家を出るとき妻き越おに「本日は皇太子の警固で遅くなつたら大津に泊まる」と、平常と変わらぬ態度で弁当を受けとつた。同夜七時すぎ膳所の監獄署に入つて大津地裁予審判事の調べに「自分一個の発意にて悲憤にたえず演じたるものなれば、あまりくわしく聞かないでください」といい、典獄に「自決したい」と短刀を所望して断わられると、同夜から絶食と水断ちを始めた。

三日後皇太子が軽傷ながら帰国ときまり、明治天皇が神戸港で見送りの予定と知らされると、「謹んで国法に従います」と断食をやめた。絶食のため傷の治りが遅く司法省は東京での裁判をあきらめ、大津地裁で開廷ときめた。

一方凶行の翌五月十二日、宮中顧問官伊藤博文、同黒田清隆、総理大臣松方正義は「ロシアから莫大な賠償を要求されるに違いない。怒りを鎮めるには三蔵を死刑にするが一番」と意見をまとめた。しかし同日、大審院長（現最高裁長官）就任あいさつに訪れた兒島惟謙こじまこれたかは「わが国の皇族に非ざれば一般刑法にて無期以下」と、死刑

に反対した。伊藤らは「わが国を亡ぼす気か」と兒島を怒鳴りつけたが、「司法は厳正でござる」と受けつけなかつた。業を煮やす松方は担当の裁判長、判事七人を呼びつけ死刑判決を強要したが彼らは態度を明らかにしなかつた。世論も「国難か。わが国の司法権の独立か」で揺れたが大勢は死刑に反対した。伊藤は開廷直前まで閣僚らに判事を個別に説得させ、湖国は騒然たる空気に包まれた。

五月二拾一日 天皇陛下東京へ還御アラセラル 畏レ多クモ陛下ニハ兇暴者ノ為ニ宸襟ヲ悩マセラレ十九日神戸軍艦へ御告別ノタメ臨幸被遊本日午前九時京都御發聲御還幸ノ途ニ附カセラル 九時二拾分別仕立瀛車ニテ七條停車場ヲ御發車余馬場停車場へ拝觀ニ趣（赴）ク 天氣晴朗ニシテ奉送者ニテ近傍立錫ノ餘地ナカリシ十時着車ノ號笛ト共ニ場前ニテ進行ヲ止ム 五分時間前日ヨリ来津シ居ラル青木外務大臣ニ拝謁ヲ玉フ 斯クテ發車ノ瀛笛ト共ニ徐々ニ進行ヲ始ム 奉送ノ大津衛戍兵ハ君ガ代ヲ吹奏シ高等官有志者一同ハ敬禮ヲ奉リシニ陛下ニハ又御會釋遊ハサル 余輩畏ミテ龍顏ヲ拝シ奉リシニ 陛下



38頁の「5月21日」の部分

ニハ御畧服ヲ召サセラレシガ宮城ヨリ百五拾里余ノ山川
 ヲ隔テテ十餘日ノ御滞在其間夙終^ス夜宸襟ヲ悩マサセ給
 ヒタレバニヤ龍顔御疲レ給ヒシニヤ覺ラレ坐^{おもむ}ロニ落
 涙ヲ催シタリ

五月二十六日 西郷内務大臣山田司法大臣突如トシテ
 来津セラル 同日縣廳内ニテ何事カ會議ヲ開カレシニ付
 テハ廳内ハ非常ノ有様ニテ頗ル威嚴ヲ加ヘタリ 旅館ノ
 如キモ警部一名巡查数名平服巡查数名立番シテ警衛頗ル
 嚴ニ其他市中至ル所平服巡查或ハ壯士ノ如キ者徘徊シ物
 情何トナク洵^恐々タリ

二拾七日 正午十二時ヨリ彌^愈々我國賓ニ危害ヲ加
 ヘ全國ノ驚擾ヲ惹起シタル兇行者津田三藏被告事件ノ公
 判ヲ大津地方裁判所ニ於テ大審院公廷ヲ開ク 之ヨリ先
 同公判ハ二拾五日ニ開廷ノ旨告示アリシモ俄ニ同日マデ
 延期セシナリ 當日ハ豫^豫テ待設ケタル事トテ當地及各地
 ヲリ来津セル代言人新聞社員及ビ多数ノ傍聴者ハ我先ニ
 ト押シカケタルガ同裁判所前ハ警吏ノ警衛極メテ嚴重ニ
 シテ同近傍ニ佇立スルヲ許サズ午前九時ニ至リ同門前ニ
 左ノ如ク貼出シテ公開ヲ停ム

津田三藏被告事件ノ對審ハ安寧秩序ヲ害スルノ虞アリ
ト認ムルヲ以テ公開ヲ停ム

大審院

此貼文ノ為我先ニト押シ来リタル多数ノ傍聽人ハ大イ
ニ失望ナシ埋怨ノ聲喧^{かまひ}スシカリシガ只^{ただ}代言人ノミ八十五
名ヲ限り決シテ公廷ノ陳述辨論等ヲ新聞紙等ニ公ニセザ
ル旨ノ宣誓書ヲ出シテ傍聽ヲ許サル カクテ行兇者津田
三藏ハ馬車ニテ膳所監獄ヨリ馬場ヲ過ギ大津裁判所ニ護
送サレシガ同人ガ當日ノ打扮^{てしおえ}(拵)ハ秩父縦縞ノ單物ニ五
ツ紋ノ紗ノ羽織ヲ着シ肌着ハ白シャツニシテ茶博多帯ヲ
締メ藁草履ヲ穿^{うが}チ頭部ニハ白縹帶ニテ鉢巻ヲナシ午后零
時三拾七分數十名ノ警部巡查看守等ニ擁セラレ徐々トシ
テ公判廷ニ入レリ 只公廷ノ模様ハ如何ナリシカ公開ヲ
禁セラレシヲ以テ之ヲ知ルヲ得ス 聞知シタレトモ之ヲ
筆ニセズ只午前ニ聞込ミタル近江新聞ニ掲ゲタル所ノ席
順ノミヲ左ニ抄録シテ想像ノ料トス

昨日開廷セラレタル津田三藏被告事件公判廷ノ席順
ハ正面ニハ堤裁判長ヲ中央トシ其左右ニ高埜安居中土
師井上木下ノ諸判事居^{まゐ}駢^{なら}ビ其左手ニハ三好川目両檢事
斜ニ控ヘ前左方傍聽席ニハ内務大臣司法大臣ノ席ヲ設

ケ(両大臣ハ傍聽セザリシト云フ)其次ニ兒島大審院
長野村大坂控訴院檢事長渡邊本縣知事其他高等官等列
席シ前右方ニ新聞記者席ヲ設ケ正面ニハ谷澤中山ノ両
辨護人及被告津田三藏列座シタリト尤^{いふ}(雖)モ這^{これ}ハ昨日
午前ニ聞込ミタル席順ニシテ其後如何ニ模様換ニナリ
シヤモ知ラズ

然ルニ當日午後四時三拾分ヨリ愈々裁判言渡シアルニ
依リ一般公衆ノ傍聽ヲ許ス旨公示セラレシニヨリ失望シ
居タル傍聽人ハセメテ言渡シノミニテモ傍聽セント續々
入来リシガ其數ハ高等官二十三人新聞記者二十四人通常
人百十七人ニシツイツレモ同時刻ニ出廷セシモ何カ都合
ノアリシト見ヘ豫定ノ時間ニ開廷セズ一時ハ夜ニ入ル有
様ニテ傍聽人ハ三々五々裁判所ノ芝生或ハ溜所ニ首ヲ擡
(集)メ頻リニ如何ナル宣告ナラント待構ヘ居タリ 然ル
ニ兒島大審院長三好檢事總長ハ腕車ニテ裁判所ヲ出デ他
ヘ赴カレタレバ明日ニ延期セラルル事モヤ等各々咳^{くせ}(咳)
ク中院長檢事總長再ビ歸リ来ラレ午後六時三拾分ニ至リ
裁判宣告アリタリ其判決書ハ左ノ如シ

判決書

三重縣伊賀國阿拜郡

上野町大字徳居町士族

滋賀縣近江國野洲郡

三上村大字三上寄留

津田三藏

安政元年十一月生

右三藏ニ對スル被告事件檢事總長ノ起訴ニ依リ審理ヲ遂クル處(處)被告三藏ハ當時滋賀縣巡查奉職ノ身ヲ顧ミズ今回露西亜國皇太子殿下ノ我國ニ御來遊セラルルハ尋常ノ漫遊ニ非ザルベシト妄信シ私カニ不快ノ意ヲ抱キ居ルトコロ明治二十四年五月十一日殿下滋賀縣下へ來遊ニ付被告三藏ハ大津町三井寺境内ニ於テ警衛ヲ爲シ其際殿下ヲ殺害セントノ意ヲ發シ時機ヲ窺ヒ居ルトコロ被告三藏ハ尋(次)デ同町大字下小唐崎町ニ警衛シ居リシニ同日午后一時五十分頃殿下ガ同所ヲ通行アラセラレタルニ當リ此機ヲ失セバ再ビ其目的ヲ達スルノ時ナカルベシト考定シ其帶劔ヲ抜キ頭部ヘ二回切り付ケ傷ヲ負セマヒラセシニ殿下ハ其難ヲ避ケントセラレシヨ被告三藏ハ其意ヲ遂ゲント之ヲ追蹶(跡)スル

ニ當リ他ノ支フルトコロトナリ其目的ヲ遂ゲザルモノト認定ス

右ノ事實ハ被告人自白証人向畑治三郎ノ陳述大津地方裁判所豫審判事ノ作りタル檢証調查証人北賀市市太郎西岡太郎吉醫師埜並魯吉巡查菊地重清ノ豫審調查及押収シタル刀ニヨリ其証憑(拠)充分ナリトス之ヲ法律ニ照ラスニ其所爲ハ謀殺未遂ノ犯罪ニシテ刑法第二百九十二條第一百二十二條第一百十三條第一項ニ依リ被告三藏ヲ無期徒刑ニ處スルモノナリ 犯罪ノ用ニ供シタル刀ハ滋賀縣廳ニ還付ス

明治廿四年五月二十七日

大津地方裁判所ニ開ク大審院法廷ニ於テ檢事總長三好退藏檢事川目亨一立會ノ上宣告ス

大審院部長判事 堤正巳

カクテ判決書ヲ朗讀セラレテ之ヲ法律ニ照ラスニ其所爲ヲ謀殺未遂ト云フニ至リ傍聽人ハ孰レモ色然トシテ案外ノ思ヲナシ互ニ顔ヲ見合セタルガ聽テ無期徒刑ニ處ス云々宣告シ終ルヤ一樣ニ國權ノ獨立ヲ保チ得テ公明正大ナル判決ニ喜色面ニ上リ思ハズ帝國萬歳日本帝國萬歳ノ

聲ヲ發スルモアリ三藏ハ時々瞑目シテ宣告文ノ朗讀シ居

ルルヲ靜聽シ居タルガ右終ルヤ起テ一揖シテ法廷ヲ出デ

傍聽人ハ何レモ愁眉ヲノベテ散ズ 蓋シ其喜憂ハ行兇者

ガ梟刑ノ輕重ニ開スルニ非ズ実ニ法權ノ鞏固獨立ヲ得タ

ルヲ歡ブナリ 茲ニ於テ此大津事件ノ公判漸ク終ル

山田西郷兩大臣ハ二十八日午前一時十六分馬場停車場

發ノ終列車ニテ三好大審院檢事總長等ト歸京シ大審院判

事ノ一行モ翌二十九日夫々歸京サル 平服巡查影ヲ收メ

テ大津始メテ平穩ナリ

行兇者三藏ヲ取押ヘシ兩車夫ノ叙勲ノコト

各 通

京都府下愛宕郡花背村字八桝

向 畑 治 三 郎

石川縣下加賀國江沼郡庄村字

加茂

北 賀 市 市 太 郎

明治廿四年五月十一日滋賀縣大津ニ於テ露國皇太子殿

下御遭難ノ際迅速變ニ應ジ勇敢往爲ノ所業ヲ以テ其危

害ヲ輕フセシム其功洵ニ少ナカラズ 依テ特旨ヲ以テ

勲八等ニ叙シ白色桐葉章ヲ賜ヒ終身年金三十六円ヲ下

賜候事

内閣總理大臣 伯爵 松 方 正 義 代

外務大臣 子爵 青 木 周 藏

明治廿四年五月十六日

此假証ハ追テ賞勲局總裁及大藏大臣連署ノ正式証書ト

引換フベキモノナリ

車夫露國ヨリ勲章年金ヲ受ケルコト

兩車夫ハ政府ヨリ勲八等ニ叙シ且年金サヘ下賜サレタ

レバ只々感歡喜涙ノ際其翌々十八日神戸ナル露國皇太子

殿下ノ御召艦ニ召サレ殿下ノ御好ミニテ盲紺ノ股引ニ着

換ヘ御面謁所ニ導カレタルガ殿下ハ平服ノ儘御出臨アリ

御身邊ニハ近侍ノ面々大禮服用用ニテ容儀嚴カニ整列シ

タリ 斯クテ殿下ハ御賞詞ヲ賜ハリタル上御手ヅカラ小

驚勲章（我國ノ勲八等位ニ相当ス）ヲ取リテ兩人ノ胸ニ

懸ケサセ玉ヒ更ニ御賞美トアリテ即座ニ貨幣二千五百円

ツツヲ與フベシトノ仰セアリタレバ兩人ハ夢カトバカリ

喜ビテ感涙ニムセビツツ例ノ饅頭笠ニ貨幣ヲ盛リテ御前

ヲ退ゾキシガ此際殿下ノ思召ニテ兩人ノ法被ニ勲章ヲツ

ケタル姿ヲ撮影セシメラル 斯クテ兩人ハ御乘艦ヨリ歸

ラントスル際後ヨリ同艦ノ水兵ハ群々ト追来タリテ呼止メ歡聲ヲ放チ兩人ヲ胴上ゲニシ更ニ種々ノ酒ナド持チ来リテ兩人ニ飲マシムルナド頗ル歡待ヲ尽シケレバ兩人ハ一層面目ヲ施シテ同艦ヲ辞シタリ 其後ノ事ハ繁ヲ厭フテ之ヲ省クコトトナシタリ

〔後段〕

被告津田三藏は冒頭、堤裁判長の問いに「このたび露国皇太子殿下に斬りつけたる事はもとより死を覚悟のうえで、わが国の法律に照らし公明正大なるご処分を仰ぎたく存じます」と申しのべた。判決がいい渡されると傍聴人席から「帝国万歳」「日本ばんざい」と数人が呼び、喜びの色を見せる者、涙ぐむ者が多かった。

兒島大審院長は裁判が終わるや、宿舎で結果を待つ法相山田顕義に報告するため人力車を急がせた。山田は死刑も期待したが、兒島の話に「それも仕方あるまい。わが司法権が何ものにも犯されぬ強固なるを示したわけじゃから……」とつぶやいた。

ついで内務大臣西郷従道の宿舎に走った。西郷は「凶悪なる津田三藏の生命をなぜ断てなかつたのじゃ。これ

ではわが国の平和は保てぬ……戦争になるぞ」と怒声をはりあげた。

二十八日に外務大臣青木周藏から判決内容を知らされたロシア公使シェービッチは「一般人の殺人未遂事件なら下級裁判所で扱って当然だ。今回、大審院の直接裁判にしたのはわがロシアの皇太子だったからではないのか。青木大臣は三藏を死刑に見せると私に確約したが無期になったのは、政府の見込み違いということか」と詰問した。ロシアでは当然死刑判決が下るものと期待していた。その後で日本政府に対し三藏の減刑を求め、日本国民に恩を売る一方、大国の襟度を見せつけようとした思惑がみごとに外され、公使は面上大いに不快感を見せたという。

三藏は北海道の釧路集治監に送られることになり、六月二十三日妻き越と義兄、実弟の三人が最後の面会に訪れた。三藏は終始無言だった。それから一週間後、大阪から船で集治監に收容された彼は「社会に対し朝廷に対し恐れ多い罪を犯し、今後ひたすら謹慎し徒刑囚として一心に働きます」と神妙に誓った。しかし八月に入つて「ロシア公使館に連れて行ってほしい。死を以て罪を

謝したい」とごねだした。典獄が「そんなばかなことができるか」とはねつける絶食を始めた。医官や看守が絶食をやめるよう、なだめたりすかしたり脅したりしたが、本人は食べたり食べなかつたりで、次第に衰弱していった。九月に入ると完全に食事がのどを通らなくなり、同月二十九日深夜寒さも加わって肺炎を併発死亡した。三十七歳。先祖の墓所伊賀上野の大超寺に葬られた。戒名慈眼堂本居士。皇太子を襲った剣は血で錆びたまま滋賀県庁に今も保管されている。

身をもってニコライ皇太子を守った後曳きの車夫向畑治三郎は、わが国とロシア両政府から合計二千五百三十六円という年金をもらえたのですっかり有頂点になっていた。彼がむだ使いや詐欺にあわないよう親心を見せた京都府知事が、毎月の生活費を除いて預金させ終生安楽に暮らせる手配をした。が彼が強引に大金を懐にしたいとせがむので二百三十六円を持たしたところ、たちまち当時流行の娘義太夫語りを妾にしまった。その後も何とか理由をつけて大金を引き出すうち日露戦争となつて、ロシアの年金を打ちきられてしまった。そこで府がいまある金で何か商売をとすすめたところ、遊び馴れて

勝手知った芸妓と客の仲をあっせんする待合業との希望で、家を手に入れ諸道具をそろえたものの車夫あがりの世間の機微にうとく、たちまち店を潰して路頭に迷う身にまで落ちぶれてしまった。体力が衰えて車夫にももどれず紙屑拾いをしていたが、大正十四年少女に暴行して捕まり、三年後に死亡した。七十四歳。

一方の車夫北賀市市太郎は事件判決の翌日、郷里石川県江沼郡庄村に帰った。駅頭には郷里の誇りとして村長以下区長ら村の名士がごぞつて出迎え、連日近隣の町村の招きを受け、歓迎会やら祝賀会で文字通り故郷に錦を飾った。石川県では専任の係を置いて年金の管理、生活相談や指導に当たらせ、土地四百坪を買って家を建て嫁を世話した。文盲なので勉強したいという彼の願いで、県職員らが算術、読み方、綴り方など小学校課程万般を教えた。その甲斐あつてか江沼郡会議員に当選、向学心をみのらせた。しかし日露開戦でロシアの年金が打ちきられると周囲の見る目が一変。ロシアのスパイ、露探とののしられ、連日町民が押しかけ悪口雑言をはき邸に石を投げつける有様。奉公人もにげだし村八分とされ、ついに故郷をすて妻の縁をたよつて一男三女を連れひっそ

りと他郷で暮らしたが、大正十三年窮死した。六十六歳。

大審院長兒島惟謙は「ロシアにおもねらず、国法を守りぬいた司法の権化」として大いに国民の名声を博した。彼は「諸大臣が刑事被告人の処分を議する違法、元老が司法の領域に踏みこまんとした横暴、不法にして天下の怪事なり」と大いに気焔をはいた。しかし間もなく彼は常習とばく者として伊藤博文らに攻め立てられ、二十五年八月大審院長の座をしりぞいた。「とばくの疑いある者を宮中晩さん会などに陪席させるわけには参らぬ」の一言が辞任を決意させた。事実彼は花札とばくが好きで大津滞在中も判事らと行っていたという。彼の胸像が関西大学の構内にひっそり立っている。平成三年五月、同大学では大津事件百周年記念行事を催し、講演会や展示会で学生に感銘を与えた。

なお明治天皇は判決言い渡しに先立ち、京都御所に兒島はじめ堤裁判長、四判事を謁し「今般露国皇太子に関する事件は国家の大事なり。適切速かに処分すへし」と勅を賜った。ニコライを見舞った際「国法により処罰すへきは勿論なれと其の罪憎みてもなお余りあり」と述べ

たと伝える。

極東の一小国日本が先進の列強を目ざし富国強兵の国策に向かつて走りだす直前、明治政府が初めて遭遇した国家存亡の試練が大津事件といえるだろう。ロシアの威に屈せずわが国法の尊厳を守りぬいたことが、その後の日本帝国の発展に自信となり弾みとなったことはまちがいあるまい。だが国も民も大きく夢を抱いたものの己の力を過信して過程を誤り、外交に負け戦いに破れ、その結果帝国は崩壊した。いま外国の顔色をうかがい、旗を示せと号令され及び腰のわれら日本人が、いつの日明治人のごとく骨と気概を持てるのか。その日のくるのを念じつつ「ある明治人の日記」を閉じたいと思う。



俳句

春愁

牧野和代

水よりも冷たき大根洗ふかな
濤音の地響きとなる炬燵かな
新米の一俵供へお命日
亡き人を拝むその手のつめたかり
食卓の椅子にはじまる今朝の冬
、と朱を一刀彫の雛の口
山笑ふわが手で鼻をつかめぬか
あるがまま病うけ止む春愁
春の雪止んで仰臥の身に戻る
啓蟄けいちっの末梢神経目覚めし日

花御堂

伊藤柳紅

啓蟄の蜥蜴のいまだ尾は茶色

庵主先づ宝珠を飾る花御堂

稲の露草の露より濃かりけり

たつぷりと雨を降らせて秋立ちぬ

落葉焚く煙の苔を這ふて来る

初桜

上田善次

昨日今日明日こそ奈良の初桜

この仕事花の盛りの過ぎぬまに

単線の鉄路が走る春野かな

滴りや木洩れ日あおき八合目

信号を少し無視して師走かな

夜長

上田千代子

窓ガラス拭いて近寄る罫雲

網戸より眞青な風を入れにけり

黄落や老いて生家の客となり

山宿の竹串青く鮎焼かる

裁つ布に鉄影おく夜長かな

青すだれ

岡良子

青すだれ越しのほど良き風の部屋

鈴ふるもだみ声もあり虫しぐれ

枯葉噛む城の石垣粗きかな

亀石を撫で飛鳥路に秋惜しむ

寒詣仁王の足の爪に鱗

福寿草

喜多まさ

佳き日

周藤智子

長閑さや猫尾を振って応へをり

眠る猫春日さす耳うごきけり

道路鏡日傘の人の往来して

余生なほ明日に夢あり福寿草

眼鏡拭き春深みゆく誕生日

師の句かけ白菊生けて佳き日かな

柚子香いて柚子湯に入りて一句出ず

汗の子の西瓜のごとく拭かれをり

米寿の俳師鑑に菊の句座

ひやひやと柿とる人を手傳へり

草笛

込山山歩

故郷

多田文子

鳥交る小堀遠州作の庭

草笛はただ聞くばかり町育ち

干梅や裏から入る里の家

秋分の入り日鳥居の真中に

長すぎる砂利参道や七五三

ものの芽やならやま結ぶ赤き糸

帰り来て空地の風の草いきれ

烏賊釣りの漁火に逢ひ北の旅

瀬戸大橋越えて故郷フルザト花菖蒲

塩鯖を好む翁の夕餉かな

冬白さす

辻 田 しま代

衿 卷

西 田 たまみ

味噌蔵へ行くにも老の冬帽子

裏鬼門塩まいて出る近松忌

初夢ねえ……夢といふもの忘れてた

冬日さす渡船場に待つ野球団

標や一棹残る塗筆筭

浮寝鳥

南 村 照 栄

記念樹

西 山 佐代子

浮寝鳥流され目覚めまた眠る

経蔵の床下高き冬紅葉

風強き中を流るる初神楽

ぬくもりのある程近くお山焼

石室の口あけしまま未枯るる

折詰のすみに一箸花菜漬け

巢の鳥に一樹を許し庭手入れ

時止まるような炎天田舎道

燃え落ちる大きい秋日ま向ひに

衿卷に息を包みて電車待つ

飛石の祇園茶屋町水を打つ

悲しみと怒りのミサや実むらさき

院展の人に交りて冬に入る

藍倉の蔭に芽吹きし路の臺

記念樹を小さく仕立梅盛る

柳生

藤井よし治

柳生在花とりどりの菖蒲園

劍豪の世にも咲きしか花菖蒲

花菖蒲園に地酒を嗜みぬ

菖蒲見の疲れを癒す新茶かな

劍豪の切りたる岩より花望む

花菜の黄

堀池敏子

瓜苗に行灯立てし夜のあらし

風あれば添竹もしてトマト苗

蟬泊めてしらく軒の明け初めぬ

かさこそと歩めば柿の照葉かな

すれ違ふ人皆知らず花菜の黄

落し文

藤澤陽子

万葉の石橋そこに芋水車

息止めて灯はゆらぐもの夜の鹿

集落はまだこの上や落し文

ただあるは有刺鉄線大枯野

足許は消ゆるばかりや鹿の影

春嵐

村上俊子

初しぐれ筆文字のふみ届きけり

百幹の竹軋ませて春嵐

参道のすなわち山路梅六分

車椅子コスモスの野に消えにけり

吹かれ立つ影も吹かれて芒原

午の絵馬

慶州の空の青さや柿光る

送葬の空低く舞ふ帰燕かな

落葉ふむ御苑の外はビルそびえ

午の絵馬高くかかげて初戎

喪の家の鐘しめやかに春の月

森田陽子

冬木

遠景は大和連山梅三分

水に透く石のさまま峽若葉

日盛りも真直に伸びる松の枝

菜園の固く小さき早茄子

立ち姿一層凛々し冬木かな

和田美代子

黄砂舞う

前向く日後向く日や寒椿

枯芝の鹿に霰が走り去る

残雪の寺に先達声高し

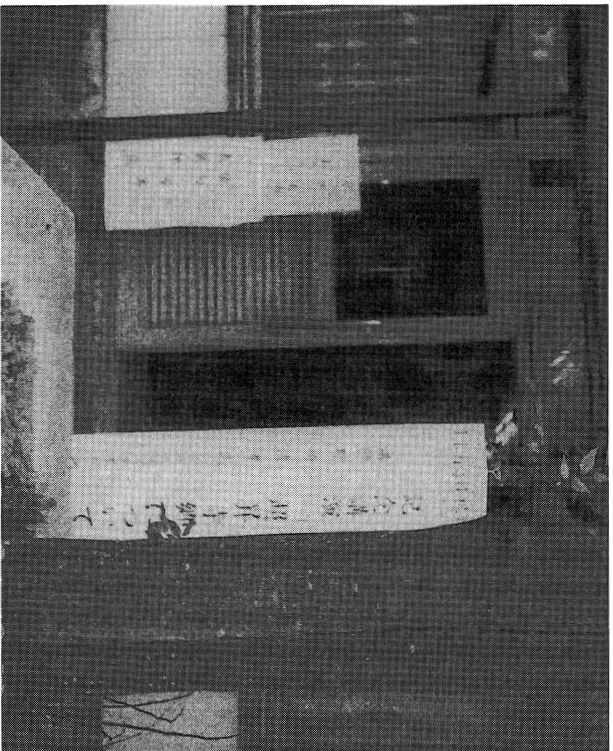
睡蓮は氷の下で息づけり

鑑真のみ寺に黄砂舞う日なり

吉田佳寿子



グループからの便り



歴史教養講座
上田 善次

「わが家のルーツ」というものに、興味をもった経験は誰しも一度や二度は必ずあった事と思います。私も祖父母から幼い頃、家系の中に傑出した偉人や、或は不遇な人生を送った人達の生涯を、面白可笑しく時にはしみじみと寝物語りに聞かされ、後年成人してから其の話を思い出し、わが家のルーツを調べてみたい衝動にかられた時もありました。が、時すでに遅く、半世紀の壁の厚さに私の情熱も消え失せ、家庭の事情もあって断念致しました。そんな時、縁あって四年前網干先生の歴史教養講座を受講させていただき、國のルーツを語られる先生の軽妙にして博識な講義に感動し、そのとこりになってしまいました。四年の歲月も案外短かいもので、日本書紀の解説や考古学に関する話題、或いは時事問題に対する御意見などを、豊富な知識を縦横に駆使しての語り口

に感動している間に、はや過ぎ去ってしまいました。

戦前の、國策にそってねじ曲げられた歴史教育を受けた戦前派の私にとって、先生との出会いは我が國のルーツに再度関心をもてるきっかけとなりました。最近歴史教科書問題で、中国や韓国などから日本の歴史教育に対して横やりが入り、政治問題化して居ります。どの國の主張が正しくて、どの國の主張が間違っているのか、浅学非才の私にとっては判断に苦しむ問題です。立場が変ると歴史観がこうも変わるものかと驚いています。ここ二百年前後の歴史でも真実の解明は永久に不可能な感じがします。

古墳の発掘により日本のルーツを探る、それは千年、二千年前の事であり、諸説が飛び交うのは当然の事と思われまます。

そんな中で、一步々々日本の歴史が明らかになってゆく素晴らしさ、それは気の遠くなる程の時間をかけ、幅広い学識を駆使して、調査に当たっておられる方々があつての事と頭の下がる思いです。私の様に興味本位の憶測で、考古学を楽しんでいる者にとっては、発掘され、発見されるたびに報導される新聞や、テレビニュースの解

説で得た知識が精一杯です。その好奇心に似た知識欲をうまく満足させつつ、しかも知識人の歴史に対するおもいつき発言に、きびしい批判をされるなど、聞くものをおきさせない網干先生の講義の巧みさに、ほとほと感心させられます。

月一回の楽しみの二時間です。政治に左右されない日本の歴史、一部学者の売名的歴史観にゆがめられる事のない日本のルーツ、永い道程とはいえ、歴史教養講座に於いて解説される先生の明解なお話しに頷きながら、自分なりに少しづつ知識の中が広がってきた事を嬉しく思つて居ります。

萬葉集講座

西山佐代子

脱線萬葉集も回を重ね、毎回楽しく拝聴しています。先生の資料集めも大へん、御苦労な事と思っています。わかり易い語り口で、折りに振られて、先生の恩師の事や、学生さんの事等お話くださるのも楽しみの一つです。戦中戦後の生活をなつかしく思い出します。

春日大社の神苑には、萬葉集に出てくる植物を、三百種も大切に育てられているそうです。今回、思いつくままに、今盛りの花木のゆかりの歌を、なん首か選んでみました。

もしきの大宮人は暇あれや
梅をかざしてここに集へる

作者未詳 (十一一八八三)

河の上のつらつら椿つらつらに
見れども飽かず巨勢の春野は

春日藏首老 (一一五六)

春の苑紅にはふ桃の花
下照る道に出で立つ少女

大伴家持 (一九四一三九)

あしひきの山の間照らす櫻花
この春雨に散りゆかむかも

作者未詳 (十一一八六四)

磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど
見すべき君がありと言はなくに

大伯皇女 (二一一六六)

藤波の花は盛りになりにけり
平城の京を思ほすや君

大伴四綱 (三一三三〇)

ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる
清き川原に千鳥しば鳴く

山部赤人 (六一九二五)

勝間田の池はわれ知るはちすなし
然言ふ君が鬚無き如し

婦人 (二六一三八三五)

萩の花尾花葛花なでしこの花
女郎花また藤袴あさがほの花

山上憶良 (八一五三八)

浅茅原つばらつばらに物思へば
故りにし郷し思ほゆるかも

大伴旅人 (三一三三三)

磐代の浜松が枝を引き結び
眞幸くあらばまた還り見む

有間皇子 (二一一四一)

萬葉集には、恋の歌、人を偲んで恋うる歌、又悲しみ

の歌等、約四千五百首あまりあるそうです。萬葉人の情緒あるゆたかな生活が偲ばれます。

講座はまだまだ続きます。

是非どうぞお出掛ください。

毎月第一月曜日 一三時三〇分→一五時三〇分まで

北部出張所会議室にて。

読書会

林 美智子

平成十三年度、読書会の活動

四月 内田康夫著『藍色「回廊殺人事件」』

日本全国を舞台にしたミステリー作品で知られる作者が、その地域がかかえている問題点をすどく描き、単なる殺人事件の作品とは違って、読者を魅了する。藍色……は吉野川河川の保護を唱える人々が中心。

五月 文学散歩 吉野川第十堰方面

六月 水上勉著『桜守』

一本一本単独で何年も生きてきた桜の価値を、桜守の大変さによって気付かされた。

美しい花に憧れての花見もよいが、この作品によって違った花見も生まれるのでは。

七月 枕草子聴講 松岡先生による講義三回目

八月 枕草子聴講 松岡先生による講義四回目

八月 中坊公平著『罪なくして罰せず』

作者の生き方や人物に魅力を感じた。

千日デパート火災、森永砒素ミルク、住専等、当時者の苦痛を共に歩み支える弁護士を、当時の苦痛を共に歩み支える弁護士の姿を垣間見た作品であった。

九月 藤沢周平著『蝉しぐれ』

一人の少年藩士牧文四郎の成長していく姿が描かれ、時代背景によって理解しやすく文章にひきこまれて読んだ。

十月 宮部みゆき著『我らが隣人の犯罪』

短編五作品で共に意外性に満ちたサスペンス。殺人現場のないからりとした、しかも科学の知識を駆使した好感のもてる作品。

十一月 玄侑宗久著『中陰の花』

芥川賞受賞作品を、文芸春秋で読んだ。人が亡くなってから四十九日の間を中陰という。その間の魂のゆれ動くさまを、題材にした作品である。正直に言う主人公とその妻の言動が十分にのみみ込めず、成仏について課題を残した。

十二月 西村公朝著『仏像の声』

仏像に表現されている心を、わかり易く解説してあり、今まで知らなかった形、印相などを知ることができた。絵入りであるが多種にわたるので、覚えるのは不可能だ。この本を片手に仏像めぐりをぜひしてみたと思った。

一月 蔵前仁一著『旅で眠りたい』

驚く程の低料金の宿を重ねて、日本からインドへの旅が続く。このハードな行程につき合う妻小川京子さんの、女性の目で見たいアジア旅行記があれば読んでみたい。三・四年前のアフガニスタン・パキスタンも作

者の目から見たまま描かれていた。

二月 素樹文生著『上海の西・デリーの東』

面白い紀行文として読みごたえがあった。例えば中国をとり上げ、この国を冷静に分析している。一枚の切符を求めするために、右往左往させられて、何日もかかる。没有という言葉のなんとそっけないことか。バックパッカー新世代必携の書と紹介にあった。

三月 枕草子聴講 松岡先生による講義五回目

松岡先生の講義は毎回二十人ぐらいの参加者がある。それでもこれだけの内容の濃い楽しい、解り易い話を、自分たちだけで独占してはもったいないと思いつつ聞かせていただいている。古典を志している人だとどれだけ役立つことか。先生の博学にはただ頭が下がるのみである。

先史学講座

清水 昇

十津川村の玉置神社に、注連縄で飾られた樹齡三千年といわれる神代杉がそびえている。老巨杉がうっそうと生い茂る境内は荘嚴そのもので、自ずから頭が下がってくる。私は七十歳よくぞ生き伸びてきたと自賛しているが、長寿の神代杉に笑われそуд。

三千年前といえば縄文時代後期から晩期に至る頃に当たる。先史学はこの時代も含め、はるか大昔の人類誕生からの気の遠くなるような年月を解明する学問である。

「先史学講座」は開講されて四年目に入る。講師は奈良大学の泉拓良教授で、先生はとてもお忙しい。年に何回もシリア・レバノンなど中東諸国へ遺跡調査にでかけられる。物騒な地域だから無事帰ってこられた先生の笑顔に接すると一安心、そしてお土産が素晴らしい。デジカメで撮った中東から地中海の遺跡を見せていただく。地雷が埋まっている恐れのある遺跡に入る怖い話、六千年前のマルタのヴィーナナス（ふっくらを通り越して超肥満体の女神の石像）と同じスタイルの女性が今も町を闊歩

している楽しい話など写真を見ながら説明がある。時には奥様もスクリーンに登場されることがある。照れ臭そうに「未編集だからね」と弁解される姿がまた楽しい。講義は生徒が年寄りといっても容赦されない。若い学生と同様に扱っていただいているように思える、ゼミナールの教室のようだ。授業風景を紹介しよう。

重い石器をわざわざ持ってきてこれ触らせて貰える。その上、二上山のサヌカイトで作った石器を頂いた。「よく切れるから気をつけて」と言われた通りよく切れる。今も大事に持っている。

実習もある。紙紐をほぐし右撚り又は左撚りの縄をつくる。二本合せて撚ると一段の縄ができる。簡単に思われるが不器用な私には難しい。先生に手とりして教えて貰ってやっとできた。これを粘土の上に転がすと縄文文様が出来る。圧痕は鏡に写したと同様に傾斜が左右逆転することを覚えた。

テストもある。土器や石器などがランダムにいくつか図示されて「古い順に並べよ」という設問である。例としてミッキーマウスが描かれた四枚の絵について時代順に並べる問題、つまり漫画とはいえネズミが人間化して

いく様子を見抜く事が肝要になる。「二十分あげるから考えて」と言われる。勿論ヒントは頂いているが、脳細胞の減少甚だしい私には難しい。解答を聞いて少しでも正解があれば大喜びする頭の体操になる。この勉強は形態・文様などから遺物の変遷を調べる型式学にあたる。今春からいよいよ本格的に縄文土器の研究・編年などに取り組む予定である。「暇ができれば博物館に行つて実物で勉強しようか」と言われる。そのうち友人に、「この縄文土器はねえ」と一講釈できるようになるかも知れない。

おわりに信濃毎日新聞社刊行『縄文発見の旅』のあとがきを抜粋する。

「旅の途中で出会った人々は、不思議とおおらかで温かみのある人が多かった。縄文と付き合っていると、窮屈な社会に住む現代人の心も伸びやかになるのかもしれない。縄文の魅力をもっと知るために、これからも遺跡の旅を続けてみたい。」

私も屋久島の縄文杉に会える日を楽しみにして、私なりに「縄文発見の旅」を続けてみよう。

短歌を楽しむ会

馬場 恭子

短歌については何の予備学習もなく、また家族からは無免許運転みたいなものだと言われながらも、短歌に魅せられて仲間入りをさせていただきました。

現在、なんとか自分が感動したことを、三十一文字にまとめて短歌を楽しむ会に出し、諸先輩の皆様からアドバイスを得ることで沢山のことを学ばせていただいています。

自分では今回はよくできたなあ、調べが整って音の響きもいいなと思っても、ひとりよがりであったり、単に説明しているにすぎなかったりで、気が解かっただけもらえないときもあります。このことから短歌はなめらかに調子よく表わすことではないと学びました。また言葉で説明されていなくても、具体的な描写で作者の心の中が生き生きと伝わってくる歌にも出会うことができました。

短歌をつくる為には、いろいろなことに常に関心をもち、物事をしっかりと視ていくことが必要ではないかと



網干先生を囲んで（短歌を楽しむ会）

思います。その為には自分自身の生き方も問われてくるようです。前向きに心優しく日々を送り、また言葉の美しさを知り、身につけることができたなら素晴らしいことです。

諸先輩は人生経験も豊富で、学習量も多く、歌会の度に様々なことを気づかせていただく場となっています。これから日々精進していきたいと思っていますので、どうかよろしくお願い致します。

園芸同好会

北村 孫衛

暖冬よりこのかた、季節が一ヶ月程も早く進んで、野辺も水辺も巷間にも緑が溢れて、とりどりの花が楽園を醸している平成十四年の春です。

園芸同好会も花作りに熱心な皆さんに支えられて、いつも盛会、時の経つのもつい忘れ勝ちに話が弾みます。

今日では、園芸店やホームセンター等で、花付苗が安価に入手出来ます。今迄に見た事も無い花も、世界中から「こんにちわ」ですから、嬉しい時代を実感します。

花屋さんで切花を求めて部屋を飾る以上に、手塩にかけた花を花材として使う心の弾みを知って欲しい。

茶会にあって、掛物から目が移って花で止る。そこで目が点になる。

掛物が読めなくてもよい。道具の値打ちに目が届かなくともよい。お茶とお菓子がおいしかったと感ぜればそれで十分。退出の前に、も一度床前の花に向い合えればこれはもう、至福の時間を持ったと言える。

この花を茶会の床より出て、日常的に玄関にしよう。居間にしよう。このうれしさを共有しよう。が、園芸同好会の合言葉と想っています。

花で家の廻りを彩り、部屋を飾り心をかざる。

花は宝石の様に秘蔵出来ない。地域の人達には勿論蝶や小鳥に至るまで、この世が楽園となる。

園芸を通して花と向い合う一刻を、よろこび多いものとする。同好会の集いです。

銅板レリーフ同好会

杉田 英二

銅板レリーフ同好会に入って、オリジナルの作品を作ってみませんか。銅板の厚さはわずか〇・一ミリですが、出来上がった作品は、とてもそうは見えないほど重厚で魅力的な作品に生まれ変わります。インテリアとして飾っても、贈り物にしても結構喜んでもらえます。

素材は美術誌・写真集・新聞・その他、気に入ったものから選びます。素材の大きさはコピー機で適当なサイズにします。これと銅板の間にカーボン紙をはさみ、ボールペンなどで転写し、表と裏から、へらを使って立体感を出していきます。次にムトウハップの液に浸して、着色し濃淡の出る様に磨きます。最後に透明ラッカーを吹き付けて仕上げます。

会員は、女性三名・男性七名で雑談をまじえながら楽しく作っております。

毎月・第一・第三金曜日十三時～十五時・西部公民館で活動しています。

「百聞は一見にしかず」一度おいで下さい。

詩吟の会

山本すま子

詩吟の会は晩学・勉学の事始め

月に三回毎水曜日北部出所の会議室で私達が集い詩を吟じている事は前々回前回と本紙上ですでに皆様に紹介し終えております。今回は詩吟を通じた私の姿をあぶり出してみたいと考えます。

私の所属は午前の部で六十歳代前より八十四歳まで十名の女性の仲間でおばあちゃんあり、御母さんあり、個性豊かなカラフルな仲間の集いです。

十四年前永年（半世紀）住みなれた大阪をあとに相楽ニュータウンに越して来ました。

足かけ大阪・京都で二十年余り、生活協同組合運動にかかわりを持ちそろそろ終りに近づき、一息ついた時、折しも吉本先生より高の原吟詩会へ入会のおさそいを受け、思案の上実際入会するまで、三ヶ月程を要しました。詩吟と云うのが今一つわからずでしたが、あまりにも吉本先生の熱心なおさそいに、ついと云うのが真実であり

ます。今をかえり見ること二年半前でしたが、そのとたんそれが私の心身の解放の場となりました。

次は詩吟への係りですが、会が始まるとまず吉本先生のリードに従って、自然体で基本を少しづつマスターしながら、腹より声を出しつつその時々々の詩吟の練習を行います。これはなかなか息の長い月日のかかわりが身に付くまでは必要です。最初はやはり物見遊山であったのでしょうか？習慣化するのに右往左往しました。

先輩の温かいはげましの中に心強さも加わり、この会へ参加はほとんど欠席は記憶いたしません。吉本先生の詩吟に対する熱い思いが伝わって、と云うのが最も適切な表現だと思えます。先生は間もなく九十四歳で今御病気で。

年に二度昇級昇段試験と云うのがあって自分のポジションによって希望すればだれもが受験可能です。

又このテストを希望する事によって、試験当日実力相応にいや、よりよく吟じたいと念じる事によって普段の練習にはげみがかかり、だれもが一段と上達すると云う自然な流れになっています。私は二段のテストを受験しました。この場合自由詩（自分の得意な絶詩―みじかい

もの) 一詩と課題吟詩と云って律詩(長い詩四題の中より二題練習し、そのうち一詩吟じることになっています。)があります。ちなみに課題吟詩を紹介しますと、①大楠公 頼山陽作 ②長安春望 中国の詩人盧綸作 ③秋日偶成 中国の詩人程明道作 ④磯原客舎 吉田松陰作でした。

私は自由詩では、李白の白帝城を吟じましたが、総師範の大村先生より常に詩のよみこみを深く。と云う御指示を受けています。四つの課題詩では程明道の秋日偶成と云うのはむずかしい漢詩ではあるけれど本心に心ひかれます。ほんのわずか今日は、この詩をのぞいてみることにします。最後にこの詩を紹介しますのでおよみ下さいます様に。

作者 程明道については、姓は程、号は明道。中国宋の時代の道学者偉人である。秋日偶成については王陽明作の啾口詩と共に悟道詩の双璧と云われ一吟天心の心を味わい得る有名な詩でもあります。

朱子学の模索として唐中期の韓愈かんゆを先駆者として宋初期の周濂溪の門下から程明道・程伊川・張横渠の三人が現れます。よって朱子学の先史、朱子学の先駆者、朱子

学の基礎(儒学とは、儒教と儒学、儒学の基本方針と歴史構造等々)があり気分に合せて色々な未知の分野、勉強にふみこもうとします。入りこむけわしさ、たのしさも又格別です。詩を吟じるには勉強が必要だと思えます。今は少子高齢化社会です。老いを如何に受け止める事が出来るでしょうか。高齢化社会の中に生きて、詩吟と云う共通の目的を軸として近くでの生活の仲間作りにもなります。詩吟の他にだれもが参加出来るレクリエーションや、遠足も企画・実施し、参加者の輪を拡げることにより、人と人のネットワークの構築も作り上げたいと考えます。

生活をおのずと語り合える仲間。人と人々が心支え合える大きな人の輪を、詩吟を通じて語り創造出来たら。——と夢は果てしなく拡がります。

今私は大阪より奈良へ引越して来て、本当に幸せであると思っています。

男富思道四萬睡閑
 兒貴入通時物覺來
 到不風天佳靜東無
 此淫雲地興觀窓事
 是貧變有興皆日不
 豪賤態形人自己從
 雄樂中外同得紅容

秋
 日
 偶
 成
 程
 明
 道

【詠方】

秋 日 偶 成

程 明 道

閑來事として從容たらざるは無く。

睡覺むれば東窓日は己に紅なり。

萬物靜觀すれば皆自得。

四時の佳興人と同じ。

道は通ず天地有形の外。

思は入る風雲變態の中。

富貴にも淫せず貧賤を樂しむ。

男兒此に到らば是れ豪雄。

手踊り同好会

毛利 公子

二〇〇一年、十一月三日の文化祭には、当時どこに行っても耳にする曲「明日があるさ」の手踊り発表させていただきました。私の日本舞踊の師である飛鳥紫園先生が、十五位前、高齢者や、足に障がいのある人達が、楽しくリハビリをかねて稽古できるように、手だけで表現する踊りを振りつけ、手踊りと名付けて、奈良新聞に発表されました。私も縁あって、日本舞踊を習うようになり、手踊り同好会の講座がなかった時から、毎年、文化祭で踊らせていただいております。

今年三月二十四日、なら百年会館大ホールで、奈良県障害者運動者協会設立三十周年記念イベントが催され、そのフィナーレで、手踊り「みんなで踊りましょう」のコーナーで、「明日があるさ」を踊りました。その時は、一般公募で選ばれた歌詞を採用し、紫園先生が振り付けて、保育園児、小学生、中学生、ボランティアの高校生、大学生、車椅子の方達、総勢二百人以上が舞台上に上って踊りました。当日は、手踊り同好会のメンバーも参加し

ました。満員の館内が一体となって盛り上り、本当に感激致しました。

誰でも、どこでも簡単に踊れる手踊り、いろんな所で広がったら良いなと思っています。現在人数は少いですが「奴さん」の曲練習しています。

何かの会で、いっしょに歌いながらやってみようと思われしましたら、手踊り同好会に声をかけてください。ごいっしょに楽しみましょう。

フォークダンスの会

宮川恵美子

新世紀を迎えた、二〇〇一年に文化協会活動の新しい講座としてフォークダンスも仲間入りさせていただきました一年余りになります。

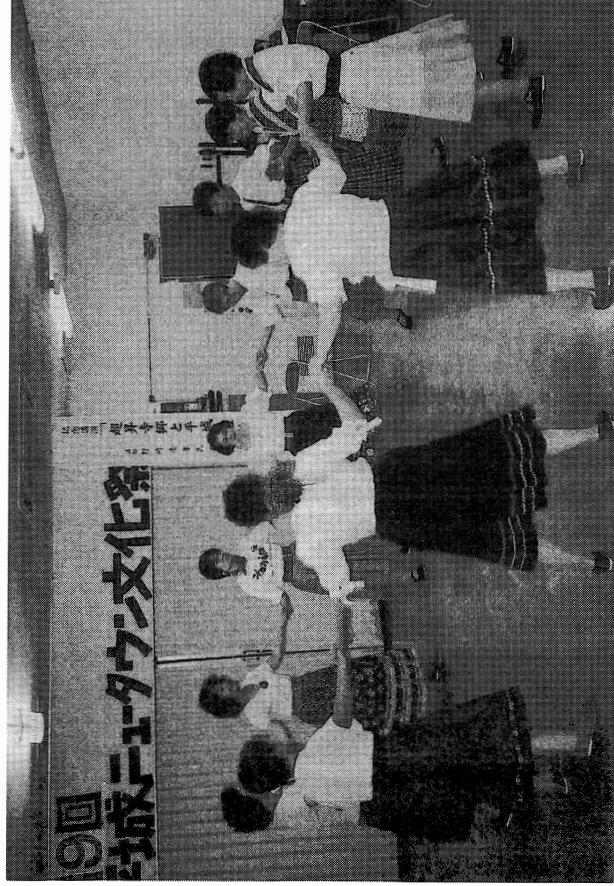
当初は、有志の熱意ある思いがけない呼びに始まり、みなさんの協力のもとに進んでまいりました。

現在では、会員数もずいぶん増え、活気あふれるサークルとして月二回を楽しんでいます。レパートリーも広がり世界の音楽はオリジナル的なもの、新しい曲、また



文化祭に初出場





日本の美しいメロディを口づさみながらの楽しいレクリエーションダンスもとり入れ時間のたつのも忘れ無我夢中に興じています。

何もかも無邪気に振舞えた遠い昔の姿に戻り、生き生きしたほころんだ笑顔はストレスも何処かへ吹き飛んでしまいそうです。

開講六ヶ月余りの初心者が昨年の文化祭に、カラフルに四曲を踊りこなせた喜びをみなさんと分かち合えることが出来ました。

今年は二回目を迎えることになり、今からみなさんと話し合いつつ胸をふくらませています。

文化協会の多種多様な講座は、他の地域では見られない文化活動に誇りを持ちつつ皆さんの元気をいただいています。盛り上げてくださる先生方や、サークルのみなさんに感謝しながら、共に手を取り合い、耳なれたリズムに各国のやさしいチェンダンス、シンプルで動きの少ないルームダンス、アメリカの明るいフォークダンスとバラエティにステップを踏みながら新しい自分を発見してみませんか。

多くの方との出会いを楽しみにしています。

俳句入門

牧野 和代

俳句と俳友

春駒が他界して早や二年、なら山句会も会員の熱意と努力によってようやく軌道にのって来た矢先、私が年のはじめに脳梗塞で倒れるというアクシデントに、すべてを投げ出す羽目になってしまった。右手足は完全に麻痺してしまっただが、幸にも意識と言語は正常であった。十日間の点滴のあと、今は言語療法、作業療法、リハビリにと励んでいる。病人にとっては、ハードな日々であるが、医者の方だけでなく、自分でも治すんだと言いきかせて必至に自主トレにも励んでいる。

今私を救ってくれているのは、春駒が私に残してくれた「俳句」である。俳句によって苦しみから逃れ、悲しみから救われている事を実感している。

更になら山句会の俳友の励ましにも大いに勇気づけられ、月例会の作品などを見せてくださる事で、苦悩から救って下さっていると感謝している。

心配した句会の方も、西山さん、込山さん、南村さん、藤澤さん等役員の惜しまぬ努力と奉仕によって、一度も欠かさず続けて下さっていることをうれしく思っている。一句出来ればもう一句、また一句と吸い込まれていく奥深い俳句の世界に魅せられて、今日も俳句に取り組んでいる。

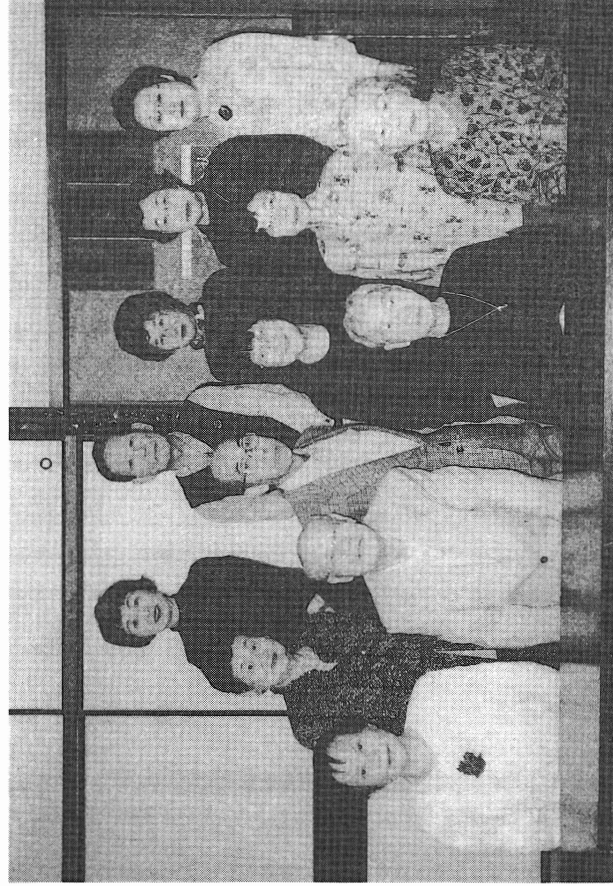
俳句入門

西山佐代子

思いがけず和代先生は、体調をくずされ只今療養しておられます。句会は休まずに続行しています。

ファイトのある先生ですので、毎回出句され、句会の選句もお願いしています。お陰様で、「ならやま集」も、百十三号になりました。先に春駒先生をなくし、その後は、和代先生の御指導を頂いております。先生の御回復を祈念いたします。

現在、社会、政界、財界と、又体力的にも難しい世の中となりました。阪神淡路大震災に、又各国に起きてくるテロ事件等、胸の痛む悲しい出来事です。



しかし、花鳥風詠を心とし、多作多捨と行きたい所ですが……。自然を見つめ、自分を見つめて句を作る事は癒しの世界といえるかも知れません。

「ならやま句会」には、句歴五十年と云ふ伊藤柳紅さんがおられます。此の度、めでたく米寿を迎えられました。ささやかな、お祝の句会をいたしました。私共もあやかりたいものと思っています。

登高の仰ぎ尊き断かな	牧野和代
秋うららひとすじの道歩みきて	南村照栄
目出度くもよねの祝ひや天高し	藤澤陽子
玉箒手に翁媪豊の秋	込山山歩
爽やかや句作一途の米寿翁	岡 良子
米寿の俳師鑑に菊の句座	周藤智子
鶴来る二千一年米寿かな	上田善次
米寿てふホ句綴り来し櫛紅葉	西山佐代子

「ならやま句会」の幹事は、喜多まささん、柏木一枝さんより引継ぎました。紙と鉛筆一本あればと、毎月出句してくださる方もあります。とても、嬉しい事です。会員の皆様と手を取り合って、和代先生の御退院を待っ

ております。

毎月第三木曜日。一時〆切。平城西公民館。

是非一度句会に御参加ください。歓迎いたします。

『続日本紀』を読む会 大出 功太

黒塚古墳・キトラ古墳・ホケノヤマ古墳等からの感動的な発掘成果により、世の中が考古学ブームに沸き返っている最中に、定年を迎えた。

にわか考古学ファンの同輩に交じって、あちこちの発掘現場・古墳・博物館に脚を運ぶうちに、古代歴史のロマンに魅了され、本物の考古学ファンになったようだ。

そのような折から、樞考研付属博物館のミュージアムトークのボランティアになったのを機に、奈良時代の歴史を学びたく、本講座に入会させていただいて、二年が過ぎようとしている。

本会は「古代史講座」から「続日本紀を読む会」へと名称を衣替えし、毎回十〜十五名の出席者で、アットホームな雰囲気のもとに開催されている。

テキストとして、直木孝次郎他訳注の「続日本紀」がプリント配布され、渡辺馨さんの即妙なる司会のもとに、清水昇さんが機関車となり、歯切れ良く数節ずつを朗読、質疑応答、解説と進んでいく。

この機関車、新幹線になったり、時には各駅停車となる臨機応変の機関車で、その時々々の社会情勢・活躍した人々の人物像などが参考資料により解説されるので、私のような門外漢でも理解しやすく、大いに助かる。

また、時には脱線もあり、これが面白い。

例えば、聖武天皇の寵愛をうけていながら、忠誠の心を裏切り位階を破毀されたという「矢代女王」の条に對し……浮気説・不倫説など艶っぽい話題が、自由闊達に披瀝されおおいに盛上り、つかの間小説の世界となるも、渡辺さんの巧みなハンドルさばきで、歴史学の世界に戻るから不思議である。

受講者は高齢化社会そのものであるが、みんな講義に取り組み態度は大変真摯で若々しく、永年の勉学の成果・博識が発言の中でしばしば発露され、私のような初心者は大変勉強になる。

いまの講座は「廢帝（淳仁天皇）」で、これから仲麻

呂の乱、道鏡を寵愛した称徳天皇との人間模様等興味のある話題に入るので、次の講座が楽しみです。

みなさん、いま「続日本紀」が面白いですよ。
一度講座に顔を出してみてください。

木目込み人形・押絵同好会 石森千代子

人形づくりと文化協会

私達の「きめ込み人形、押し絵」は、古来より引き継がれ、今もなお私達の生活の中に豊かさや潤いを与えてくれる日本の伝統文化なのです。そしてまたその文化を将来に引き継いでいく使命があるのではないかと思えます。

私達のサークルでは人形作りの基本は勿論のこと、最近はその基本を少しアレンジして、一人ひとりそれぞれの想像力で、創作作品に取り組んでいるところです。月二回の教室に集まってくる人達は楽しそうに絶えず口を動かす、また器用に人形作りの手も動かすといった特技

をもっており、今は文化祭に向けての作品作りに精を出しています。文化祭が終われば小旅行、年明けには新年会、春には花見と次々と楽しい行事が待っています。

顧みますと、私自身四十代半ばにこのサークルに入会をし、早一〇数年、この私がかこまで続けてこられたのは何んだったのかと思うとき、そこに幸いこの地域（平城ニュータウン）には、先人達のご努力のお陰で全国的には稀な、こんな素晴らしい文化協会という組織を作った下さっていたからだと気がつきました。

そこの活動は、地域で同じ趣味を持つ者同志が集まり、上から強制されるのではなく、先輩から受けた手解き（文化）をまた後輩に自主的に引き継いでいくという、手作りのサークルなのです。そしてこの地域に在住する人であれば誰でもが、何時でも入ることが出来るのです。度々のスランプ、そして幾多の困難（自分自身の健康、サークルの運営）を乗り越えてこられたのも、やはり他にはないこの文化協会というユニークな魅力ある組織の一員であったからだと感謝しています。

この街にも高齢化の波が加速度的に押し寄せ、六十歳以上が五人に一人と進んできている今日、御多分に漏れ

ず私もこの波に乗り始めています。趣味を通して人と人とのふれあいを大切にしながら多くの友達作り、そしてお互いの助け合い、そんな中で得た貴重な財産を、これからの人生の糧として生き生きと素敵に過ごしたいと思うと同時に、この文化協会を支え続けてくださった地域の文化の発展に、そして、この街に住んでよかったと思える街作りに少しでも寄与してゆきたいと思えます。

写真同好会

寺嶋りくお

昨年度以降、新入会が少しづつ増え、毎月の例会はいままでの右京団地集会所では手狭になり、平城第二団地集会所に会場を移し、日時も毎月の第四土曜、午後二～四時に固定して活動を続けています。

また、毎月の撮影会は、四月八日(日) 大和郡山城桜祭り、五月十三日(日) 伏見稲荷大社く石仏の石峰寺。

六月十日(日) 大和民族公園の紫陽花と花菖蒲。七月八日(日) 室内撮影、レンズとストロボの使い方。十月七日(日) 大津祭。十月二十七日(土) ～三〇日(火) 文



(写真同好会)

化祭参加、出展十五名、三〇点。十一月十一日(日)明日香路写真コンクール撮影会、高松塚。十二月十五日(土)もちいどの商店街、大宿所のお湯立神事。十二月二十四日(祝)食事会、ひまわり館、田よし。平成十四年一月十三日(日)朱雀門から観る若草山焼き。二月十七日(日)京都植物園。三月二十四日(日)JRフォトウォークに参加、安土風土記の丘く文芸の郷く常浜水辺公園を実施しました。

同好会で腕を上げた人の中には、県高齢者美術展や市展、県展などのフォトコンに出品し好成績を上げておられます。

最近の一眼レフカメラは、軽量でオートフォーカス(焦点距離が自動)で、プログラムオート(シャッタースピード、絞りが自動)で、しかも、フィルムが良くなっているのです、初めての方でも、とても写し易く、気候の良い時は野外で、暑い時、寒い時は室内で楽しむことができ、女性や高齢者に最適の趣味だと思います。

しかも、とても奥深いもので、一枚のフィルムに、例えば、約四十五分間の若草山焼きの花火から全山が炎に包まれるように写る(長時間露光)や、水滴の落ちる瞬

間を写す(高速度シャッター)や、雫の中に映る景色を写す(マクロレンズ、クローズアップレンズ)ことなどができ、ビデオカメラや絵画以上に可能性と芸術性の高い趣味でもあります。

会には、ベテランから初心者まで、老若男女が和やかに集っています。あなたも、旅の写真をよりよく写すために、子供や草花の成長をステキに記録するために、一緒に写真を楽しみませんか。

書道講座

田室 西崖

書は日本人の心を慰め癒すもの

このところ、テロや金権腐敗の政・官・民癒着に世間が騒がしいですが、こんな時代にあって、私たち書に携わる者の役割は何だろうとよく考えます。

経済不況が深刻で、リストラが横行し失業者が過去最高を記録するなど、将来に一見展望が見えて来ないなかだからこそ、心のケアが求められるのではないでしょう

か。花や緑の自然に身を浸すことも有効でしょうが、芸術の世界に足を踏み入れることも、新たな可能性に向かう意欲をかき立てる源泉になり得るのではないでしようか。

ストレスを解消するのに、美的な感動を覚えることは非常に効果があると思います。特に日本人は、日本的な伝統をふまえた文化に、容易に溶け込む感性を自ら具えております。書の世界についていえば、日本人であれば墨の色とか香りとか、筆で表わした線に何か郷愁のようなものを覚えるのではないでしようか。

「書は人格を表わす」と古来いわれてきました。書作は、きわめて直截に自己を表現し、同時に自己を見つめなおすすぐれた美術活動なのです。

しかるに、ワープロやパソコンの普及によって文字を書く機会は少なくなってきました。今や筆は日常の筆記用具ではなくなりました。加えて学校五日制の実施に伴い、義務教育での書写教育の時間は殆んどカリキュラムから消滅するという、日本の伝統芸術の一端を担う書文化にとって危機的情况が進行しています。五日制で授業時間が圧縮され、なおかつ英語やパソコンの授業が増

すのと引きかえに、自分で思考を組み立てて実践する部門や、美的感性を磨く分野の教育、人間性ゆたかな資質を育てる教育がなおざりにされているのではないかと憂慮に耐えません。

科学の進展によって、生活のための労働時間が短縮されて生まれた余暇を、芸術を鑑賞したり、自ら芸術活動に参加する機会をふやすのが、本当にあるべき高度な社会だと考えますが、如何でしようか。それにしても、幼児のうちからゆたかな感性を磨くために、学校教育や社会教育のなかで、そのために十分な環境を整備することが不可欠だと思われまます。

たしかに、筆は日常の筆記具からはずれました。でも筆は持たなくても、日本人はやはり文字は書きます。書くことが少しでもあれば、日本人なら美しく書きたいと思う筈です。ちなみに、同じ漢字を使う中国では、一方でパソコンの急激な普及に努めながら、公教育の中に毛筆習字が重要な位置を占めています。美しい文字を書くにはやはり毛筆によって書法を学ぶことが望ましい。揮毫による反復練習を続けることによって美しい文字を書けるようになり、書の奥深い楽しみが生まれるのです。



一九九六年 石室山崖書

懷素

何かつい我田引水のようにりましたが、書作品に関心を持ったたり、本当に書くことが好きな人が一人でも増えることを望んで、筆ならぬペンを置きます。

押し花を楽しむ会

久本 美鈴

平成十年の秋、折りしも開かれていた文化祭。通りすがりの私が、足を踏み入れた会場に展示された、すばらしい押し花作品の数々。その花の鮮かな事。見事に咲いた牡丹や薔薇——。押し花と言えば、子供の頃、夏休みの宿題に、新聞紙に挟んで押しした植物採集の、あの茶色く枯れた草花でした。——それが、どうでしょう。こんなにきれいに、赤や青・黄色の色素が鮮かに残されているのです。押し花に魅せられた私は、さっそく教室に、参加させて頂きました。

講師の廣崎先生が、また、お優しい方で、途中から一人入ってきた私に、花の押し方の基礎から教えてくださいました。ごめんどろだった事と思います。有難うございました。これからも、よろしくお願いいたします。

今は総勢三十名の、ちょっとした大所帯に、第一木曜日と、第四水曜日に分かれて、相変わらず、一から十まで先生に、ごめんどろをおかけしながら、楽しませて頂いております。

四月には、イチゴの押し方を、教えて頂きました。えっ、イチゴと思われるでしょう。そうなんです、あの、甘い、汁気たっぷりのイチゴが、まあ、見事に乾燥イチゴに変身するんです。

まず、カッターナイフで、イチゴを半分に切り（イチゴは新鮮な、実のしっかりしたものがよいでしょう）そして、丁寧に中身を割り貫きます。——真剣の余り、イチゴを持つ手に、思わず力が入り、気が付けば実は潰れて、かわいそうな姿に。かと思えば、割り貫き過ぎて、虫食いイチゴになってしまったり、大変です。甘ずっぱい、おいしいかおりに誘われて、「先生、中身食べていいですか」なんての質問に、「カッターナイフがきれいならばね」。ユニークな、先生のお答えに、教室は、思わず爆笑の渦。——割り貫いた中に、ティッシュペーパーを詰め、最初は新聞紙に挟み、二キロ位の重しを、（あまり重すぎると、実が潰れてしまいます）。新聞紙は、



文化祭の準備を終えて

小まめに取り替えます。汁が付かなくなったら、乾燥マットに。マットが湿ってきたら、まめに乾燥させましょう。(レンジで一分チン。手軽に、マットは乾燥させる事ができます)。それは、それは、おいしそうな、まっ赤なかわいいイチゴに、押しあがります。さあ、どんな作品を作りましょうか。

五月五日は、子供の日、りっぱな兜に鯉幟は、どの花を使って、作ろうかなあ。そう言えば、三月三日には、パンジーの、かわいいお雛様。お正月には、カラムシノウで作った鶴に、松・竹・梅を添えて作った色紙を飾り、十二月には、クリスマスツリーの額作り。金木犀の黄色い小花は、キラキラ輝く夜空の星に。クリスマスカードには、リースフラワーや、バーベナ等の小花。色の変わりにくいチドリソウが大活躍しました。

でも、何と言っても、文化祭の出品作品には、熱が入ります。皆な今年もと張り切っておられます。

その時は、皆様もぜひ御覧下さい。

パッチワーク研究会

堀部 澄枝

昨年の文化祭で作品を拝見させて頂き、自分でも何か作りたいという思いにかられ、早速入会を致しました。

図柄や配色など数種類の組合せで感じが随分違い、想像以上に奥が深い事が半年たった今、少し分かりかけて来たような気がします。

最初は小さい物から手掛けた方がいいのではと考えていましたら、リーダーの方から『小さい物も大きい物も一緒ですよ』と、アドバイスを頂き、思いきって、当初からの夢でありました『ベッドカバー』にチャレンジをする事に決め、気長にマイペースで取り組んでいけばいいかなと思っていましたら、『今からなら秋の文化祭に充分間に合いますから大丈夫ですよ。』と思いがけないプレッシャーを頂き、思わず頭がクラックとなりました。

リーダー、並びにやさしい諸先輩方のアドバイスを頂き、楽しいお話や為になるお話など盛り沢山の時ならぬ『人生研究会』にもなってしまう事があり、あっという間に時間が過ぎてしまいます。

こんな素敵な研究会に出会う事が出来、本当に良かったと思います。

秋の文化祭に、私の作品が展示されるかどうか楽しみにしてして下さい。

中国語同好会

山田 玲子

中国語同好会は、今年で五年目を迎えます。

四月から初心者の方が五人入会して下さいました。毎週木曜日午前九時三〇分から、松村如洋先生のご指導のもと、基礎から学習が始まりました。私たちは大へん嬉しく大歓迎です。

『中国語 発音よければ 半ばよし』といわれています。早く綺麗な四声で発音でき、先生に『好』と言って頂けるよう頑張りましょう。毎回とても楽しく勉強出来ます。

隣の国、中国の素晴らしい風土、歴史、食文化、習慣等なども学び、皆さんとご一緒に中国へ旅行に行けたらいいですね。



奈良国際交流会館にて（5・11）（中国語同好会）

外国語は、生涯学習です。気長に命のある間学びたい
と思います。会員の皆さんと仲良く集っています。私も
趣味を同じくする友も得て本当に喜んでいきます。

より良い出合いもあるんですね。平城ニュータウンに
も、中国の方も多くお住まいで私は三組の方々とお付き
合いをさせて頂いています。まだ、カタコトで話をして
います。

皆さん、どうぞ一緒に勉強しませんか、お待ちして
います。

地酒を味わう会

松本 敏夫

二一〇回を超えた「地酒を味わう会」だが、四月の例
会は会始まって以来の珍事となるところだった。大阪・
浪速区の「山中酒の店」より届くはずの地酒が正午過ぎ
ても来ない。店の手違いで、私と同姓の同じ京都でも船
井郡の得意先に発送したらしい。地酒を味わう会で「味
わう」酒がないという事態も心配されたが、どうにか会
当日の昼すぎに手元に届き、冷やならぬ「ヒヤヒヤ」酒

を味わった。

毎回顔ぶれは多少変わるが、二〇人前後の出席で第二土曜六時半に例会を開いている。場所は地元ニュータウンはじめ奈良市内から、新祝園と各地の割ぼう、創作居酒屋、そば屋、すし屋など転々としており不定。会費は三五〇〇円〜五〇〇〇円で毎回おいしい料理と各地の地酒（主に純米吟醸）五、六銘柄を味わいながら楽しいひとときを過ごしている。

▼一年間を振り返って

- 六月 M社宝塚保養所（一泊すきやき） 「往馬」
- 七月 ひまわり館「エルバ」 「奥播磨」
- 八月 三井ガーデンホテル屋上（ビール飲み放題）
- 九月 富雄「そば処・羽（はる）」 「勝山」
- 十月 神功「ならのは」（創作懐石） 「羽前白梅」
- 十一月 右京「葵ずし」（すし他） 「扶桑鶴」
- 十二月 般若寺「御逢詞集」（忘年会） 「鯉川」
- 一月 県庁横「天平倶楽部」（新年会） 「鷹勇」
- 二月 酒蔵見学 伏見・斎藤酒造 「英勳」
- 新祝園「塾」（創作料理） 「英勳」
- 三月 三条通「梁山泊」（なべ料理） 「^{しめ}張鶴」

四月 木津川台「ととや」（魚料理） 「黒龍」

五月 富雄「そば処・羽（はる）」 「十四代」

（皆様に お禮を 申し上げます。）

妻に逝かれて

初代会長 吉田 篤史（九十四歳）

結婚生活六十八年、世間にざらにあるものではないと自負しても恥ではなく、むしろ褒めてもらうに値するところではないでしょうか。自然夫婦の年齢も分かるはず。夫満九十三歳、妻八十九歳。その妻の幸子が昨年十二月十一日、天寿を全うして他界した。社会には多くの不幸があるが、妻に先立たれることも最たる不幸の一つ。吉田家には昭和三十二年、義母の葬儀以来不幸がなかった。家内は子供、男三人女三人、孫十四人、曾孫十三人、臨終には大勢の肉親に見守られて往生できたこと、何より不幸中の幸いと思っている。







夫婦心中以外、死は別々になることは分かっているが分らないのが人間の心。家内は三年この方、入退院の繰り返しで、最後は十一月十四日入院し、十二月七日（死期を悟ったのか、家に帰りたいとの事で）主治医の許可をもらって自宅に戻りました。その前の四日に私や皆にお別れの最後の自書を残して居りました。十日はただだまっしかり意識もあり、私の作ったリンゴ汁、スープ、重湯を昼食にびっくりするほど沢山食べました。それが最後でした。

葬儀後、朝、遺影の前でお勤めをしていると、知らずに涙が出て、声にならない事がありました。が、何でしたか悲しみか、可哀相か、寂しいか複雑でした。私も昨年四月頃から体調を崩して十キロ痩せ四十キロまで落ち、体力も気力もめり込んでしまいました。日にち葉より方法はないと、この四月にやっと文化協会の同好会の例会に出席し御無沙汰を詫びた次第です。悲しんでも帰らぬものは人間、死です。日にち葉で最近少しづつ元気になるてきました。好きな畑いじりや霊場参りもできそうです。ご心配をおかけしました。誌上をお借りして、お礼申します。

絵画の会

伊藤 勝己

「絵画の会」に入会して

勤めを終えて「あか道」の遊歩道の第一団地の急坂を登り切ったあたりに辿り着くころ、生駒山から北へ延びる稜線に今正に沈もうとする夕陽。白ではなく、黄ではなく、橙色でもないその神々しい光を受けた雲は、橙に輝やき、そして数十歩行く間に赤・紫・藍と変化し、茜に染まった山なみや家々は薄墨の中に色を濃くしてゆく、と書いてもその複雑に、刻々変化する素晴らしい夕焼けを文字には書き切れません。

この感動を絵に描けたらなああと、常々思っていました。昨年定年退職を機に文化協会の「絵画の会」に入会させて頂きました。絵は学校で習った程度でテーマを与えて黙って描かせるか、せいぜい「塗り足らん。もっと塗り込め」という程度の教え方だったように思います。しかしこの会では色々な技法、作品の見方、批評、著名画家の側面、美術史等あらゆることについて教えて下さっ

ています。

又会のメンバーの皆さん方も、素晴らしい経歴を持って
おられるにもかかわらず、その素振りも見せず、和気あ
いあいと、そしてマイペースで描いておられ、二時間が
あっと言う間に過ぎてしまいます。

人は皆頭の中ではそれぞれ完成した絵を描いていると
思います。その絵をいかに完璧に画用紙の上に描くかと
いうことが、絵を学ぶことなのだと思います。

あの夕焼けの感動を、少しでも絵に表現できたらと思っ
ています。

表装の会

大橋 芳子

今回「表装」の事を書くに当たり、先輩方が、「表装
の方法」について詳しく書いておられますので、私は
「表装の種類」についてご紹介いたします。表装は、次の四
つに分けることができます。① 裱褙ひょうばい ② 憧褙どうばい ③
輪補りんぽ ④ その他です。(裱褙とは、佛などを表すため
に作られたもので、真の位と言われます)。「憧褙」に

は、真の真(神聖表具) ↓如来を表すもの。真の行(本

尊表具) ↓観音を表すもの。真の草(中尊表具)があり

ます。「憧褙」は、行の位と言われ、大和仕立とも言わ

れます。行の真(大和一文字廻し) 行の行(大和表具)

(行の草(中風帯)があります。「輪補」は、草の位とも

言われます。草の行(大和輪補)と、草の草(輪補中風

帯)があり、一般に「茶掛」と言われています。「その

他」には、台貼り表具、くり貫表具、袋仕立て(明朝仕

立てを含む)、見切り表具(中国式)、創作表具がありま

すが、まだまだこの限りではないそうです。作って行く

工程にはそれぞれ、細かい決まりがあり、本紙(飾りた

いもの)によって、表装の種類がおのずと決まります。

例えば、一文字廻しと言うのは、本紙を一文字の布を細

く切り、本紙を囲む方法や、垂れ風帯と言うのは、天の

布に、一文字の布を七分ぐらいの巾で、帯状に、二本仕

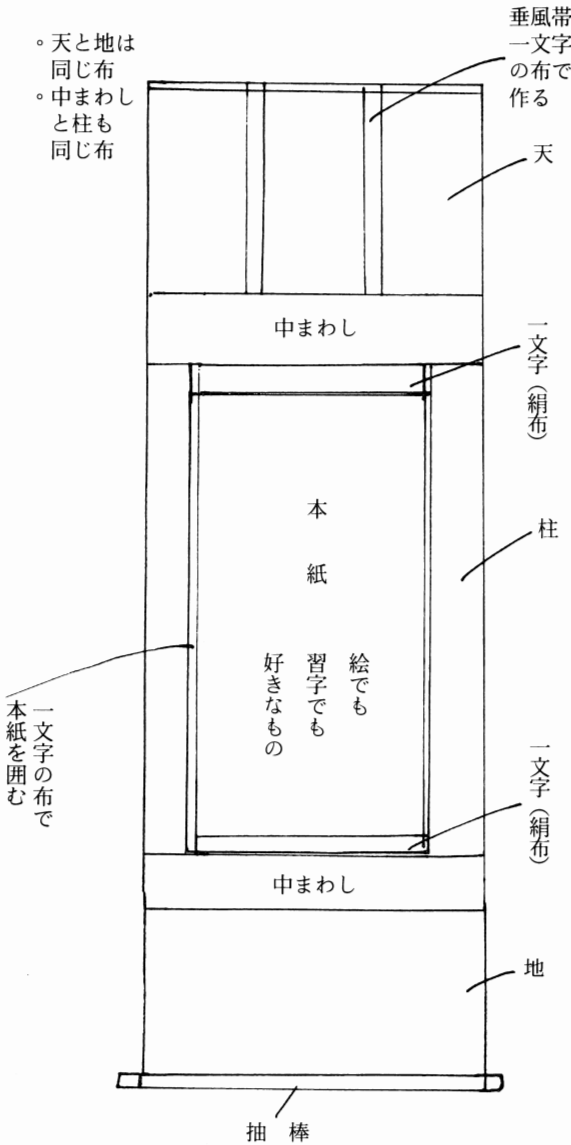
立て垂れ下げる状態を言います。色紙掛け、葉書掛け、

等多く作っては友人に差し上げられます。上達すれ

ば、佛表具、茶掛け、等にチャレンジしています。

私は子どもの頃から父に、「床の間は、神の座す所、
いつもきれいにしておくこと、季節の軸は早目に掛けか

(大和一文字廻し)



えること」など、細かく言われ、手伝わされたことを思い出します。昔から「軸表装」を習いたいと思っておりましたが、西島先生にお出逢いし、教えていただいた、早三年半になります。教えていただいた作品は、始めのうち駄作ばかり、次の作品こそはと気持は入るのですが、自分の満足出来る作品は出来ません。技術が伴わないので仕方がないねと、教室ではお互い励まし合いなが

ら楽しんでいきます。寸分の狂いのない先生の表装を見せていただくにつけ、技術のすばらしさ、品の良さや知恵に感服します。先生のおっしゃることを守って作成しているつもりですが、技術が伴わない生徒をよく我慢して教えてくださっています先生に、心より感謝申し上げます。

山歩きの会

西幹 友雄

ハイキング・周辺の魅力

ハイキングは、景色をみて歩くだけではもったいない。そこでハイキングの楽しみを三つ程御紹介いたします。

一つ目は花をみる。花との出会いであり、普段は見られない花を目にできるのはもちろん、いつも漫然と見ていた花の美しさを再確認できる機会でもあり、花の名前を知るには写真を撮ったり、スケッチをしておいて、帰宅後に自宅でゆっくり調べる方法もあり、又すこしめんどうですが図鑑を携帯して、現地において名前や性質を確認する方が印象も強く覚えやすい。

二つ目は樹をみる。木々に囲まれて歩くことが大半で、樹木の名前を知っていると、しらないのでは違います。松と杉は誰でも知っていますが、クヌギ、ヒノキ、ナラあたりになると意外と知らない人が多いのはありませんか。木を判断するには全体の形であり、樹形、高さ、葉の形や付き方、色、最初はとつきにくいですが、いくつか

覚えるのとあとは特長が見分けやすくなります。

三つ目は山菜を探す。食用にできる植物かどうかを識別するためには、できるだけ山菜にくわしい人と同行したい。特にキノコは種類が多くて、山菜を摘む前に注意しておくことは、野草だからといって勝手に判断しないこと。フキノトウやワラビ、ゼンマイなどは計画的に育成している場合も珍しくないので、採取禁止の場所には絶対に入らないこと。また根から引きぬかない様、マナーを守りたいものです。

鳥の声、そよ風や木々のざわめきに耳傾け、小さな花、燃え盛る紅葉に目を向け、自然と親しみながら楽しいハイキングを初めてください。

本年度山歩き会の、これからの予定をお知らせいたします。

六月―生駒山 七月―稲村岳 八月―八淵の滝
九月―竜門岳 十月―学能山
十一月―御手洗溪谷 十二月―愛宕山

料理を楽しむ会

岡田 越子

作る楽しさ

私は去年迄十一種類の講習に行つて居りました。今年も年齢も考へて、体調、家庭の事情などで休んだり退部したりして大分減りました。

でも、その中でも料理は退めたくありませんし、とても楽しく、続けたく思つて居ります。少しでも変わったもの、味のいいものを作りますと、家族も喜びますし、自分も満足して又作りたいなと思ひます。

その中でも十三年四月の「ささみのピカタ」などは、余り好きでない鶏のささ身もおいしく食べられますし、大へん安く、一品が簡単に出来上りますので時々して居ります。

デザートでは十年五月に習つた、これも余り好きでなかつたヨーグルトを使った「ヨーグルトケーキ」は、夏は冷蔵庫に円型に作り、八等分に入れておくと一週間位持ちますし、とてもおいしく、急にお客様がいらし



さあ今からいただきます

でも出せませすし、切らした事がない位無くなりかけると作っておき、作り方も頭に入ってしまったて、おっくうでなく作れます。

それから、おほぎは寺育ちの私には、何か行事があると手伝はされていましてので簡単に作ってしまい、御近所にくばっておりましたので、自慢の料理で「岡田さんやうて」と云われると、ついでしゃばうて目分量でして、時々「岡田さん、あんが少しやわらかくない？」と云われると、どきっとしますが、何とか形に治め内心ほっと致します。

こうした楽しい料理もチーフの松村さんが材料の心配から、大勢のガヤガヤしているおばさんを、テキパキと指導して下さるからと何時も感謝して居ります。

健康の為楽しく作り、そして楽しく頂く料理の会の発展を祈って居ります。

皆様の参加をお待ちしています。

「……歩く会」

廣田 省吾

近年、古墳からいろいろと貴重なものが発掘され、私達は、はるか古代の生活を想像さしてくれまます。私達の「……歩く会」は、古代人が歩んだかも知れない道を、身近に感じながら歩いていきます。

平成十三年度の「……歩く会」は左記の様に歩きました。

四月八日（晴れ）通常は偶数月は第四日曜に実施するのですが、今回、四月は桜の開花にあわせて第一週の日曜に歩きました。快晴です。JR山科駅前には散ってゆく桜を惜しみながら歩く人々で賑わっておりました。

まず皆様を迎えてくれたのは、JR山科駅前、満開がやや過ぎた枝下桜でした。ここの疎水沿いの道は、桜並木の名所として知られています。私達はJR山科駅から先ず山手へ。赤穂、浅野家ゆかりの瑞光院境内の桜を覗き、後山科陵から毘沙門堂の見事な枝下桜を愛でて今日の歩く目的である疎水添いの咲き誇る桜並木の道を歩



山科から疎水沿い桜並木 (4・8)

きました。はらはらと散る花びらが音もなく疎水の流れにただよう様子は、心を和ませてくれるものがありました。疎水がトンネルに入るのて再び疎水と合流するまで、私達は自動車がものすごい音をたてて走る国道1号線の脇の歩道を通って発電所と今も保存されている傾斜鉄道(インクライン)の名残りのレールが有る小公園へ。京都と琵琶湖を結ぶ運河の建造は、当時の京都の一大プロジェクトでした。その中心になる人物、田邊朝郎は二十一歳だったとはまったくの驚きです。インクラインから道なりに歩いて南禅寺へ。南禅寺では石川五衛門で有名な山門に登る事ができます。(有料)

南禅寺から永観堂へ。疎水記念館を見て終了。今日は桜と音も無く流れる疎水に沿って歩いた事は何時もと違った味わいの有る歩きでした。参加者 十名

五月十二日(金) 晴れ、やや薄曇り 山科から疎水沿いの二回目、前回とはうって変わって新緑に包まれての歩きでした。参加者 四名

六月二十四日(日) 雨 中止

七月十三日(金) 晴れ 二上山 近鉄南大阪線、二上神社口駅から出発。夏の強い日差しが、樹木の間から差



二上山 雌岳にて (7・13)

し込む中を標高五一七米の雄岳をめざしましたが、電車の車窓でみるより急坂で、息が上がって汗を流しながら二時間をかけて登りました。雄岳には天武天皇の皇子の、大津皇子のお墓があります。山頂を駆け抜ける涼しい風に皆さんが一息つきました。付近の平らになっている木陰で昼食、しばし休息の後、雌岳へ。途中の道の石垣に古代武器や狩猟用に用いられたという黒色の鋭角の石、これがサヌカイトと教わる。雌岳頂上で大和三山、はるかに葛城山脈を望遠、下山へ。途中山肌からしたたる清水で顔をふき、汗を拭った時の気持ちのよさは格別でした。中条姫伝説の当麻寺境内を通り、近鉄当麻寺駅へ。駅手前のお店でいただいた草餅と冷えたお茶の美味しかったこと。参加者 六名。

八月休み

九月三十日(日) 曇り後小雨 畝傍山周辺

(三月 雨で中止のため二度目 五名)

十月二十一日(日) 曇り 竜田川周辺

近鉄竜田川駅の東側を出発。まず椿井井戸と呼ばれる此の古井戸は、聖徳太子と平群神手將軍の逸話が残っている。五分程離れた所に平群氏と関係が深かった椿井春

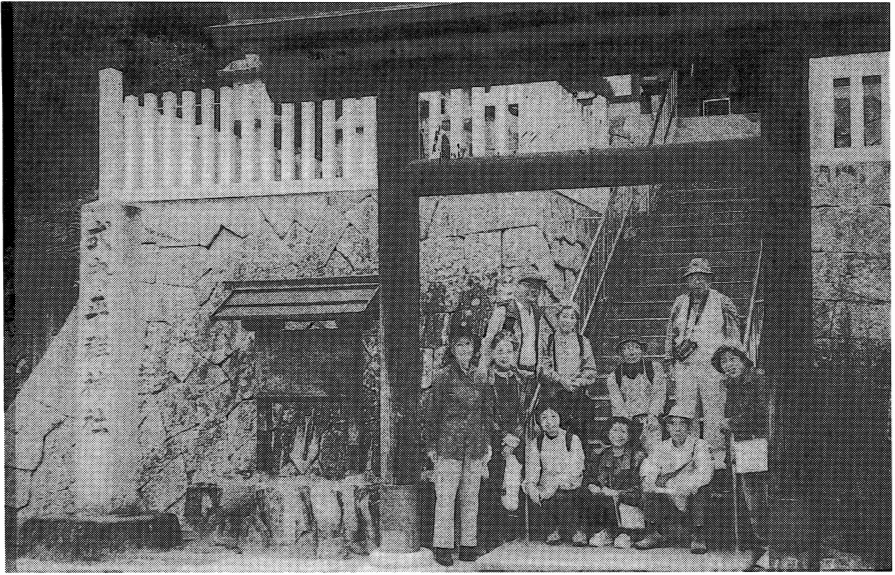
日神社があります。社の前には宮山塚古墳があり奥には石棺が見えました。さら坂を降りて行くと平等寺春日神社があり、その神社の鳥居の額東に文字どおり扉の付いた箱があり、「中に何入っているのやろうな?」。

線路を渡り駅の西側、烏土塚古墳へ。平群谷で最大規模の古墳ということで当時六世紀中頃、屈指の権力者のお墓と言うことは解るけど、その権力がどの位強大だったか二十一世紀に生きる私達には想像もつきません。この古墳から村の中を通り北の丘の方へ。この丘は公園に整備されていてそこで食事。斜め下に西宮古墳があります。石室内に入れて石棺を見ることが出来ます。丘の東側に平群神社があります。古代豪族の平群氏の祖神を祀っていたと言われている由緒のある神社です。次に西の高台に。平群石床神社が鎮座しています。平群石床神社と消渴神社が同じ敷地内にあり消渴神社には土で作った小さなお団子が幾く皿も備えていました。下の方の病気に効く神様らしいです。石床神社には旧社地が近くにあつて御神体は樹木の中に高さ六米の巨石があり古代からの巨石信仰である。

普通、竜田川と言えば紅葉ですが今回は古代とつなが



竜田川周辺 (10・21)



竜田川周辺 (10・21)

る一味違った竜田川周辺の歩きでした。参加者 十名
十一月十六日(金) 晴れ 竜田川周辺の二度目 四名
平成十四年

三月二十二日(金) 曇り後雨 郡山城下町周辺

奈良に最も近い郡山の城下町の古き町の面影が残っているのを案外知らないのではないかと曇り空の中を出発。つい最近まではメインストリートであった柳町を市役所の方から歩く。菊屋本店や昆布の専門店屋さん古き面影が残っている。現在、商売は廃業されていますが、その建物は郡山市から指定を受けている四丁目の老舗呉服屋さん「和田徳」の当主、和田さんに家の中に案内していただく。木造三階建て当時としては珍しいハイカラな大きな天窓がある。部屋数が三十位あるということ。往時の盛んな商売がしのべれます。この和田家に隣接して郡山八幡神社、源九郎稲荷神社、外堀の一部を公園化した外堀公園、江戸時代の町屋を修復し、面影など残る紺屋町を通り、最近竣工した郡山城ホールに来たとき雨が降り出しましたので普段は許可が出ないのですが、特に許しを得て昼食、丁度ガラス越しに目の前の城址公園に咲く桜を見がらの食事でお花見が出来ました。食事後、



郡山城 (3・22)

郡山城趾へ、今年は三月とはいえ、早く桜が咲き雨にかすみ風情のあるものでした。本丸の石垣の中に石地藏さんが組み込まれていて「逆さ地藏」として有名です。

大和郡山藩主の菩提寺の永慶寺へ。さすが殿様のお墓だけあって立派なものでした。

大和郡山カトリック教会内にキリシタン配流碑があります。明治新政府によって弾圧を受けた悲しい物語もあったようです。

豊臣秀吉の弟秀長の墓所、大納言塚の回りの桜は満開でした。大納言塚から南側にある陵墓参考地になっている平地としては大形の前方後円墳である新木（にいぎ）山古墳の周囲をとおり金魚資料館へ。郡山の金魚は全国的で毎年金魚掬い大会が行われます。大型から金魚掬いにつかわれるような小型まで、模様も顔も形もさまざま値段が気になる金魚達でした。参加者 五人

本年度も無事歩くことが出来ました。御参加くださった皆さん。資料とアドバイスをくださった皆さん。そして下見にお付き合いくださった皆さん。本当にありがとうございました。お願い。……歩く会に良い所があれば教えてください。

宮作りの会

新司 輝江

中野先生が亡くなられて、指導者なしでこの会を続けて一年半、よくここまでやってこられたなあと思います。思えば、何を作るにも、先生におんぶに抱っこ。もう少し真剣にやっておけばよかったと反省しています。

今では、お互いに知恵を出し合い、教えあって（とは言っても、私は習うことばかり）一日楽しくやっています。これからも、できる限り続けていきたいと思っています。

英語講座

鎌田 時栄

四名の方々と平成元年の七月にクラスを初めてから満十三年がたちました。しかし残念ながら、土曜の英語講座もフィナーレに入って来たようです。

私自身、英会話クラスというほど英会話力はなく、一貫して聴く力をつけるということを目的にテープの力を借りて英文のリピートそして暗唱を繰り返してきま

した。しかし、最初の頃は少人数のため、自由会話の間もたっぷりあり、「今日あの方どんな事をお話になるのかな？」等時間もゆっくり流れていたと思います。今も同じことをやっているのですが、二つの教材をやっているのと、お陰様で参加者が増えた事で、私自身がせっかちになり、皆さんにじっくり話をしてもらっていないように思います。

文化協会のような非営利団体が語学クラスを持つことは確かに難しいです。難しさの例をあげると、まず、入会してくる方々の英語学習への目的が個々違うことです。仕事に直結させたい方、趣味で勉強したい方、会話をしたい方、楽しく本を読みたい方、ヒアリング力を伸ばしたい方、サロンみたいにただ楽しみたい方、文法を学びたい方、インターネットで海外に英文を送れるようになりたい方、海外旅行に役立てたい方、やり直しの英語をやりたい方、総合的に英語力を付けたい方等。皆さんは自分の目的が実現することを期待して参加されるのですが、講師が一人だと一つの目的を目標とした一つのやり方しか出来ないのです。その結果、見学だけでやめられる方や、数年して目的と違うからとやめられる方があ

るのはしかたがない事です。勿論多くの講師が存在すれば解決することなのですが、そこがボランティア団体のつらいところです。

もう一つの問題点は生徒さん達が入会される時に持っておられる、英語学習の経験の差です。私の十三年間のクラスにも元通訳の方、元英語教師の方、塾の英語の先生、仕事現場で英会話を使っておられる方、数年の英語圏滞在経験のある方々がおられる一方、高校、大学卒業後英語とは無縁だった方もたくさんおられます。

しかしこの英語経験の差の問題の多くは個々のやる気と努力と精神的なもので解決出来ることがこの英語講座を通して確信出来ました。精神的なものとは「語学を勉強するには失敗を恐れず、間違うことを恥ずかしいと思わないこと」と語学の達人達がいつも言われていること。もう一つの精神的な事とはどのような仲間と勉強を続けるかということ。「あの人英語が出来る」とか「出来ない」とか批評好きなばかりの勉強仲間ではその勉強の場は居心地の悪い場でしかなく、すぐ逃げ帰りたくなりまします。幸せな事に講座にはそんな批判的な態度や言葉を発する人は過去においても現在においても誰一人なく、皆

さんはどの方も謙虚で明るくて素晴らしい方ばかりです。肉体的に苦しくても、心優しい仲間に会えるということがクラスに向かわせる大きな原因になっているのは私だけでしょうか？と言いつつ、私は皆様のその優しさに甘えてしまい教授法に全く進歩が見られないのはつまり事実であります。

しかし、やる気と努力と人柄だけで現実の経験の差を簡単に埋められないのももう一つの事実です。かなり経験を積んだ方々が連続して入会されたことが一度ありました。悩んでしまった私は新しい教科書をかかなり難しい物に変えてしまったのです。その結果数名の退会者を出してしまいました。つらいことでした。その失敗を契機に現在のようにクラスを初級的なものと、少し難しい教材を使う中級のなものに分けることにしました。殆どの方が両方の教材を勉強してくださっているのが現状ですが。

初期のころから私は経験豊かな方々を私の先生に、又は辞書の代わりになってもらっていました。申し訳ないと思いつつも、そういう方々の存在が十三年間続けられた大きな理由になっていることは言うまでもありません

ん。

文化教室としての講座をやめることは本当に個人的な理由です。同居している母が九十三歳という高齢になって来ていると言うこと、義母義父が今年になってから相次いで、大病を患い入院したこと、主人が佐賀県へ赴任したこと等、私が講座を突然やめなくてはならないであろう様々なことが私のまわりにあふれ出てきたのです。

文化協会の理事の方々には本当にお世話になりました。感謝の気持ちで一杯です。にも関わらず何一つ協力出来ず申し訳ない限りです。最後の最後にこの原稿も遅れ皆々様にご迷惑をかけてしまいました。

入会を希望されているのに私のやり方を通すために長期間待っていたり、その後連絡がうまくつかなくなったり、思いあがった失礼な事もたくさんしてきました。どうかお許しください。

終わりにこの十三年間の私の拙い授業に数回以上参加して下さった方々のお名前を私の心からの感謝にかえてここに記させていただきます。もし私の手違いで載っていない場合はどうぞお許しください。又同時にご一報くだされば幸いです。本当にありがとうございます。

片桐一夫氏、高松三枝子氏、川島静氏、竹内ナナエ氏、
田村寅生氏、木戸房江氏、辻田美智代氏、山元明子氏、
大土真理子氏、香山智恵子氏、河村美智子氏、
井上みな子氏、宮崎登喜子氏、荒尾芳枝氏、河口純子氏、
田中みや子氏、坂口有子氏、中村節子氏、麻生道子氏、
高岡文子氏、福島京子氏、塩出喜久恵氏、福井和子氏、
梶野智子氏、渡邊公美子、藤原百合子氏、井上裕子氏、
渡邊久子氏、松本良子氏、石崎路子氏、西尾弘子氏、
吉村宏美氏、島田仁氏、藤戸洋子氏、佐藤幸代氏、
柳澤万里氏、松井久子氏、國村薫氏、泉谷昌代氏、
西垣内秀子氏、安田浄氏、加藤啓子氏、渡邊久江氏、
山田洋子氏、佐々木淳美氏、森野滋氏、犬伏房子氏、
岡田雅子氏、上田美千代氏、松島正子氏、咲間千恵子氏、
江田英士氏、木内敞氏、松重知保氏、鈴木和子氏、
杉田百合代氏、鈴木時子氏、山本みどり氏、堀真理子氏、
堀田幸子氏、枅田賢一氏、馬場恭子氏、田中真理子氏、
熊田てる子氏

主 な 使 用 教 科 書

(大修館) ELEMENTARY LL ENGLISH COURSE, JUNIOR LL ENGLISH COURSE,

NEW ACE LL ENGLISH COURSE

(Macmillan Language House) Listening Challenge, Idioms for Everyone

(KINSEIDO) LIVELY LISTENING ! (Pint) Twentieth Century News

(東京書籍) New Horizon 中学 2, 3 年生用

(弓プレス) 20 Current Topics

古
川
柳

ままごとの所帶くずしが甘えて来

おふくろをおどす道具は遠い国

母親はもったいないがだましよい

一生のお願いを母は聞き飽きる

母親は息子の嘘をたしてやり

国の母生まれた文を抱き歩き

恋しきは親父の臍すねに母のへそ

観月の夕べ

(十六夜)

(13:10:2)

十六夜の宴 平城ニュータウン文化協会



第十九回 文化祭 記録



展示の部

◎前期 十月二十五日(木) ～二十七日(土)

◆短歌 網干 善教 荒居 智子 大浦小枝子

岡田 越子 柏原 英一 片桐 一夫

木庭 和子 玉置 小代 寺嶋 勅雄

中川都哉子 松村せつ子 森田 陽子

安田 和子

◆寫作りの会 赤井美津子 秋山 静 新司 輝江

榎原千鶴子 岡田 越子 幸路 喜代

杉山 啓子 林 美智子 若原 和子

◆園芸 北村 孫衛

打田 照子 榎原千鶴子 岡田 越子

幸路 喜代 鈴木 幸子 林 美智子

山内 梅乃 吉川 普子 若原 和子

菅 千尋 住吉 紀子 新司 輝江

◆地酒 写真・日本酒ラベル

◆書 田室 西崖



◎中期 十月二十八日(日)～十月三十日(火)

◆俳句 牧野 和代 伊藤 柳紅 上田 善次

上田千代子 岡 良子 込山 山歩

周藤 智子 多田 文子 辻田しま代

南村 照栄 西田たまみ 西山佐代子

藤澤 陽子 堀池 敏子 森田 陽子

吉沢 幸江 和田美代子

◆写真 赤坐 右一 伊藤 昌一 皆藤 甫

菊地 俊和 北側 勝 北原 吉雄

志智 英子 田中 啓子 田中 利忠

寺島 勅雄 西口 義朗 沼尻 侑

◆軸装 野原 雅子 原 昭子 加藤 秀子

西島 芳子 大橋 芳子 水野 繁三

西村 従子 平田 忠子

◆押し花 山本 康彦 大迫くき枝 宇野木久代

広崎 光子 伊藤 京子 鈴木 幸子

奥谷 敏子 木村 洵子 住吉 紀子

杉岡安貴子 杉山 安枝 南村 照栄

高橋 笑子 榊 鈴子 野原 雅子

西山佐代子 西田 安代

久本 美鈴 袋井 妙子 松村せつ子
御手洗敦子 山中優美子 若原 和子

島津 益子

◎後期 十月三十一日(水) ～十一月二日(金)

◆絵画 梶野 哲 石川 和子 上田 善次

大台 雅生 小西 淑彦 込山 嘉代

澤田 実子 北嶋 輝夫 高橋ゆかり

出口真喜子 南村 勝次 西村 通弘

広田 省吾 山崎 明 山田 晴美

吉沢 幸江 根来 良子 山田ツル子

◆銅板 込山 博介 稲田 義彦 皆藤るみ子

杉田 英二 中村 一郎 山崎 明

レリーフ 山田 正

◆木目込彫 谷口 直子 網干佐和子 石森千代子

押絵 奥村 淳子 北 アサ子 島田 守恵

杉田 瓊子 杉山 安枝 長柄 清子

東山 幹子 御手洗敦子 森本 登子

山下 彰子 鷺塚 順子

上演の部

◎日時 二〇〇一年十一月三日(祝)午後一時三〇分

～四時三〇分

◎会場 北部出張所会議室

◎主催 平城ニュータウン文化協会

上演 一三時三〇分 挨拶 文化協会会長 網干 善教

来賓挨拶

1) 箏曲 一三時四〇分 菊地雅千絵・ぐるーぷ翔

「彩」/吉崎 克彦作曲

第1箏 棚橋 愛

第2箏 田頭雅千香

「賞花亭にて」/松本 雅夫作曲

第1箏 田頭雅千香・南湖雅千紗

中嶋 恵子

第2箏 吉本 康子・福井 栄子

第3箏 比良 尚美・山内 正子

十七弦 池中雅千鶴

十三弦 菊地雅千絵



2) 詩吟 一四時 詩吟の会

コンタクター 西尾 堤久

吟題 作者 吟詠者

出郷作 佐野竹之助 独吟) 西村 諄輔

早発白帝城 李白 独吟) 香川 サウノ

獄中作 橋本 左内 独吟) 周藤 吉雄

崖壁の母 藤田まさと 独吟) 西脇 孝子

九月十三夜

上杉 謙信

独吟) 宗徳 岳宗

九段桜 本宮 三香

独吟) 岩井 静栄

江南春望 杜 牧

独吟) 山道 岳蓬

万葉 青丹よし

小野 老

独唱) 花田 岳媚

太田道灌 作者不詳

独吟) 吉田 岳翔

荒城月夜の曲を聞く

水野 豊州

連吟) 増井公道・香山 泰生

杉田英二・周藤吉雄

香川 サウノ

西村諄輔・花田岳城

3) 舞踊 一四時三〇分 手踊り同好会

「おてもやん」「明日があるさ」

毛利 公子・小森美恵子

島川恵美子・山内 梅乃

「寿（月やあらぬ）」

林 育子

「浮草の宿」

島川恵美子

「黒田武士」

久門 富美

「萩桔梗（沖の瀬入り）」

山内 梅乃

「雪の浜町河岸」

毛利 公子（飛鳥華蓉）

4) ギター演奏 一五時

曲目 バッハ作曲 チェロ組曲第一番全曲

出演 ギター独奏 中村 昭三

ギター合奏

カルマンドギターアンサンブル

1) ショーロ

2) グリーンズスリーブス

3) ラ・マラゲーニア

5) フォークダンス 一五時三〇分 フォークダンスの会

曲目

1) おおシャンゼリゼ ダブルサークル

2) ドナドナ シングルサークル

3) プロモロアカ（ルーマニア）シングルサークル

4) 心うきうき（島倉 千代子）シングルサークル

宮川恵美子

木庭 和子・大浦小枝子・玉置 小代

松村せつ子・岡田 越子・打田 照子

若原 和子・片岡 圭子・住吉 紀子

馬場 恭子

2002 (平成14) 年度

第20回

平城ニュータウン文化協会総会

日 時 2002年5月19日 (日)

受付 PM 1:00

開会 PM 1:30

場 所 北部出張所会議室

I 開会の辞

II 会長挨拶

III 来賓祝辞

IV 議長選出

V 議 事

(1) 2001年度事業報告

(2) 2001年度会計報告・監査報告

(3) 役員改選

(4) 2002年度事業計画

(5) 2002年度予算

(6) その他

VI 閉会の辞

第20回総会 記念講演

午後 2:30から

『高松塚30年』

講師 関西大学名誉教授

網 干 善 教 氏

懇 親 会

午後 4:00から



2001年度事業報告

- 2001年4月1日 ニュース1号発行
5月8日 協会報発行 全戸配布
13日 地区センター建設促進委員会
19日 常任理事会
27日 第19回(2001年度)総会
記念講演『キトラ古墳の話題』
講師 網干 善教先生
- 6月1日 ニュース2号発行
2日 地区センター建設促進委員会
7日 地区センター建設促進委員会
24日 地区センター建設促進委員会
7月2日 地区センター建設促進委員会
8月1日 ニュース3号発行
9日 地区センター建設促進委員会
23日 常任理事会
9月8日 地区センター建設促進委員会
11日 文化祭展示部打ち合わせ会
10月1日 ニュース4号発行
2日 観月の会
12日 地区センター建設促進委員会
15日 協会報発行 全戸配布
10月25日～11月2日 文化祭開催
25日～27日 前期展示の部 短歌、笛作りの会、園芸、パッチワーク、
地酒の会、書
28日～30日 中期展示の部 俳句、写真、押し花、表装
31日～11月2日 後期展示の部 絵画、銅版レリーフ、木目込み人形・押し絵
11月1日 ニュース5号発行
1日 「層富」発行
3日 文化祭記念講演 「超昇寺郷について」
講師 野崎 清孝先生
3日 上演の部
詩吟、舞踊、箏曲、ギター独奏、フォークダンス
3日 ごくろうさん会
8日 地区センター建設促進委員会
24日 常任理事会
12月15日 地区センター建設促進委員会
2002年1月1日 ニュース6号発行
13日 右京・神功「新春を祝う会」参加
14日 朱雀・左京「新春を祝う会」参加
27日 セミナー 「スロベニア・クロアチアへの旅」
講師 光岡 祐彦先生
2月1日 ニュース7号発行
3月27日 常任理事会

2001年（平成13年）度決算報告

平成13年4月1日～平成14年3月31日

【収入の部】

(単位、円)

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
前年度繰越金	167,331	167,331	0	
会 費	570,000	576,000	6,000	@1,500×384人
後 援 費	70,000	70,000	0	各自治連合会、自治会
寄 付 金	10,000	20,000	10,000	講師お礼戻り
雑 収 入	669	4,376	3,707	銀行利息 他
合 計	818,000	837,707	19,707	

【支出の部】

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
事 業 費	80,000	41,612	△ 38,388	文化祭、セミナー
助 成 金	84,000	84,000	0	講座、同好会 3,000×28
会 議 費	10,000	2,543	△ 7,457	会議、資料、他
広 報 費	410,000	375,510	△ 34,490	会誌、会報、ニュース
事 務 費	20,000	15,475	△ 4,525	事務用品、他
印刷、消耗費	80,000	78,750	△ 1,250	コピー機消耗品
通 信 費	4,000	2,685	△ 1,315	郵送料
渉 外 費	10,000	7,500	△ 2,500	協賛費
雑 費	10,000	6,529	△ 3,471	項目にない出費
予 備 費	10,000	0	△ 10,000	
積 立 金	100,000	100,000	0	特別会計繰り入れ
小 計	818,000	714,604	△103,396	
次期繰越金		123,103		
合 計	818,000	837,707		

特別会計 南都銀行スーパー定期14年3月31日(日)現在 ￥255,384

備品 コピー機一台 LEODRY2540

13年度 会計監査報告

会計帳簿、証票類他、関係書類等を精査した結果、適正であったことを認めます。

監事 東 叡 ㊟

西 村 美佐子 ㊟

2002年度事業計画

はじめに

当「協会」は、地域での日常的な文化活動を通して、地域コミュニティー・住民の親睦と和を実現していくために、当時の自治会・連合会の「街づくり」の方針のなかで結成推進されてきたものです。

この設立趣旨にそって、地域住民の多くの方の、参画を期するとともに、会員の研究創作発表、相互の交流などの場としつつ、地域文化の発展に、寄与することを基本としていきます。

また地域四自治連合会をはじめ、スポーツ協会、教育懇談会、地区社会福祉協議会などの各団体の活動とも連携して、ひきつづき「街づくり」に貢献していきます。

おもな計画

- 1 講演会の開催
総会記念講演
文化祭記念講演
- 2 セミナーの開催
- 3 会誌『層富』の発行
- 4 会報の発行（全戸配布） 文化協会案内号
文化祭 案内号
- 5 ニュースの発行（隔月発行予定）
- 6 大和路見学会 春1回
秋1回
- 7 文化祭の開催
- 8 観月の夕べの開催
- 9 年間を通じて趣味の講座開催
- 10 その他

会の発展を期しての工夫など会員各位の、提案、役員会決定などにもとづき適宜事業を推進したい。

2002年（平成14年）度予算

【収入の部】

（単位、円）

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	123,103	
会 費	570,000	@1,500×380人
後援費	70,000	各自治連合会、自治会より
寄付金	10,000	
雑収入	897	銀行利息他
合 計	774,000	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
事業費	70,000	文化祭、セミナー他
助成金	84,000	講座、同好会の助成 @3,000×28
会議費	10,000	会議、資料、他
広報費	400,000	会誌、会報、ニュース他
事務費	20,000	事務用品
印刷、消耗品費	80,000	印刷機器消耗品、コピー
通信費	4,000	郵送料、電話代
渉外費	10,000	協賛費等
雑費	10,000	各項目に該当しない必要経費
予備費	6,000	
積立費	80,000	コピー機積立費
合 計	774,000	

講 座 ・ 同 好 会 一 覧

	定期講座・同好会	担 当 者	☎71局	曜 日 ・ 時 間	予定会場
1	歴史教養講座	網 干 善 教	6510	第2火曜日(10時～12時)	北部出張所会議室
2	万 葉 講 座	松 岡 禮 一	2964	第1月曜日(13時半～15時半)	北部出張所会議室
3	先 史 学 講 座	泉 拓 良 問合せ 山内梅乃	1654	第3月曜日(15時～16時半)	北部出張所会議室
4	書 道 講 座	田 室 西 崖	7035	第3月曜日(13時～15時)	北部出張所会議室
5	読 書 会	問合せ 山内梅乃	1654	第4金曜日(10時～12時)	北部出張所会議室
6	フランス語講座	休 講			
7	英 語 講 座	鎌 田 時 栄	3150	第1・3土曜日(9時半～12時)	平 城 東 公 民 館
8	英語初級講座	橋 本 友 子 問合せ 山内梅乃	1654	毎月曜日(10時～11時半)	北部出張所会議室 右京ふれあい会館
9	中国語同好会	松 村 如 洋	9605	毎木曜日(9時半～11時半)	北部出張所会議室
10	俳 句 入 門 (平城山句会)	牧 野 和 代 問合せ 西山佐代子	1777 4950	第3木曜日(13時～16時)	平 城 西 公 民 館
11	短歌を楽しむ会	網 干 善 教 問合せ 木庭和子	6510 3494	第3火曜日(13時半～16時)	北部出張所会議室
12	絵 画 の 会	梶 野 哲 問合せ 上田善次	3295 72-2539	第1・3・4火曜日(10時～12時)	北部出張所会議室 神 功 集 会 所
13	写 真 同 好 会	赤 坐 右 一	0111	概ね2回日曜日、ニュースで通報	野 外
14	山 歩 きの 会	西 幹 友 雄	6102	第2土曜日(雨天中止の場合は第3土曜)	野 外
15	… … 歩 く 会	広 田 省 吾	0207	奇数月第3金曜日偶数月第4日曜日	野 外
16	園 芸 の 会	北 村 孫 衛	0823	第4木曜日(13時～16時)	右京4-7-5
17	野草をしらべる会	休 講			
18	拓本を楽しむ会			自主活動 問合せ 事務局まで	
19	詩 吟 の 会	吉本音市・西尾弘子 問合せ 花田清美	5036 2787	第1・2・3水曜日(10時半～11時半) (13時半～15時)	北部出張所会議室
20	手踊り同好会	毛 利 公 子	1989	第1・2金曜日(10時～12時)	北部出張所会議室
21	押し花を楽しむ会	廣 崎 光 子	0774-73- 0702	第1木曜日(10時～16時) 第4水曜日(10時～16時)	北部出張所会議室
22	表 装 の 会	西 島 芳 子	72-0335	第2・4木曜日(10時～17時)	北部出張所会議室
23	料理を楽しむ会	松 村 せ っ 子	9605	第3木曜日(10時～12時)	平 城 東 公 民 館
24	銅板レリーフ同好会	問合せ 山崎 明	43-3326	第1・3金曜日(13時半～16時)	平 城 西 公 民 館
25	パッチワーク研究会	打 田 照 子	2879	第2・4金曜日(13時～16時)	北部出張所会議室
26	宮 作 り の 会	問合せ 幸路喜代	72-0363	第2・4月曜日(10～16時)	北部出張所会議室
27	木目込人形・押絵同好会	谷 口 直 子 問合せ 石森千代子	3183	第1・第3水曜日(10時～14時)	北部出張所会議室
28	地酒を味わう会	松 本 敬 夫 問合せ 鈴木昭弘	1690	第2土曜日(18時半～)	会 場 不 定
29	フォークダンスの会	宮 川 恵 美 子 問合せ 玉置小代・片岡圭子	0066・3128	第1火曜日(13時半～16時) 第3月曜日(13時半～16時)	北部出張所会議室 朱雀ふれあい会館
30	「続日本紀」を読む会	渡 辺 馨	72-4855	第4火曜日(13時半～15時半)	北部出張所会議室

会 則

第一章 総 則

第一条 この協会は、平城ニュータウン文化協会という。

第二条 事務局は、平城西公民館に置く。

第二章 目的及び事業

第三条 会員の研究・創作発表、知識の交換並びに会員相互間及び他の文化団体との連絡提携の場となり、総合文化に関する進歩普及をはかり、地域文化の発展に寄与することを目的とする。

第四条 前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 講演会・研修会・展覧会・発表会・文化講座等の開催。
- 2 関連文化団体との連携及び協力。
- 3 研究の奨励及び研究業績の表彰。

第三章 会 員

第五条 平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、協会の目的に賛同する者とする。会員の種別は次のとおりとする。

1 正会員 年間会費一、五〇〇円

但し、高校生五〇〇円

2 賛助会員 この協会の趣旨に賛同する者で年間会費五、〇〇〇円以上納める個人又は団体とする。

二、会員の更新手続きは不用とするが会費は総会後三ヶ月以内に納入のこと。但し、二年間会費納入なき場合は退会と見做す。

第四章 役 員

第六条 協会にはつぎの役員を置く。
会長一名、副会長三名、常任理事若干名、事務局長一名、事務局次長一名、会計一名

4 会誌の発行。

5 その他目的を達成するために必要な事業。

理事若干名、監事二名。

第七條 理事は、正会員中より選出する。

二、会長、副会長、常任理事は理事の互選で定め総会の承認を得る。

三、事務局次長、事務局次長、会計は理事中より会長がこれを選任し、総会の承認を得る。

四、監事は会員中より二名選出する。

第八條 会長は協会を代表する。

二、副会長は会長を補佐し、会長事故ある時は代行する。

三、理事は理事会を組織し、協会に関する事項を審議し執行する。

四、常任理事は理事会の決定に基づき業務遂行に当たるとともに、総会で決議した事項を執行する。

五、事務局長は会務の遂行に関する理事会、常任理事会等の決議に基づき全般の事務連絡、処理に当たる。

六、事務局次長は事務局次長を補佐する。

七、会計は会計事務を処理する。

八、監事は会計帳簿を監査し、通常総会において報告する。

第九條 顧問・参与を置くことができる。顧問・参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二、顧問・参与は会議に出席して意見を述べることができる。

第十條 役員の任期は二年とし、再任は妨げない。

二、補欠より選出された役員の任期は、前任者の残任期間とする。

三、役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行う。

第五章 会 議

第十一條 理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、理事の三分の一以上から会議の目的を示して請求のあったときは、理事会を招集しなければならぬ。

二、理事会の議長は、会長又は会長の指名する者とする。

三、理事会は理事の二分の一以上出席しな

ければ議事を開き議決することができない。

四、理事会の議事は、出席理事の過半数を

もって決し、可否同数のときは議長が決す。

第十二条 常任理事は、会長、副会長、常任理事、事

務局長、会計によって構成し、必要に応じ会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第十三条 通常総会は毎年一回会長が招集する。

二、臨時総会は、理事会が必要と認めたと
き会長が招集する。

三、総会の議長は総会出席者の中から指名
する。

四、総会の議事は、出席者の過半数をもつ
て決し可否同数のときは議長が決する。

第十四条 次の事項は通常総会に提出して、その承認

を受けなければならない。

1 事業報告及び収支決算

2 会計監査報告

3 事業計画及び収支予算

4 その他理事会において必要と認められた事項。

第六章 会 計

第十五条 経費は会費並びに補助金、その他の収入に
よる。

第十六条 会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三

月三十一日に終わる。

第七章 会則の変更

第十七条 この会則は、総会の議決を得なければ変更

することができない。

第八章 補 則

第十八条 この会則施行についての細則は、理事会の

議決を得て別に定める。

第十九条 この会則は昭和五十八年二月二十七日から

適用する。

二〇〇二年度

役員名簿

岡田越子	大迫くき枝	打田照子	上中敏央	上田善次	石森千代子	赤坐右一	谷口直子	川口勇	東	西村美佐子	大浦小枝子	玉置小代	山内梅乃	渡辺馨 <small>かおる</small>	光岡祐彦	網干善教
------	-------	------	------	------	-------	------	------	-----	---	-------	-------	------	------	------------------------	------	------

松村如洋	松岡禮一	前川良雄	廣崎光子	廣田省吾	花田清美	橋本友子	西山佐代子	西幹友雄	西村通弘	西島芳子	南村照榮	田室西崖	田中幸夫	鈴木幸子	込山博介	木庭和子	北村孫衛	鎌田時榮	梶野哲
------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----

理事

山田綾子	山下良吉	濱口光良	柴田晃良	澤田實子	北川尚子	喜多正惠	河村美智子	笥ゆり子	大工美智子	大井政子	毛利公子	宮川惠美子	松村せつ子
------	------	------	------	------	------	------	-------	------	-------	------	------	-------	-------